

登校拒否・家庭内暴力・働くということ

—— 症例Mを通しての臨床青年心理学的考察 ——

田 畑 治 伊 藤 義 美¹⁾ 池 田 博 和
江 口 昇 勇²⁾ 生 越 達 美³⁾ 間 宮 正 幸⁴⁾

I 問 題

前報(田畑他, 1977)において, われわれは青年が個としての人間生成を営むさなかで, 必然的に出くわす自己確立, 自己決定, 個性化, 個別化, あるいはアイデンティティ(自我同一性)といった危機(Krise)に直面することが最大の自己課題となる時期として, 青年期を位置づけてきた。そして現代的状況における青年に, より本質的に接近するために, 方法論的な検討も加えてきた。われわれの立場を集約するならば, 1) 青年期自我と秘密・対人的距離の重視であり, 2) 「自己と社会への対決」を通しての「自立」の時期をさし, さらに3) 継時的援助という視点の重要性を強調することにある。

ところでいかなる臨床的研究も, その中心に具体的個別的事例が据えられ, それらの具体像をもとにして, 先の所論がより鮮明に浮かび上がり, かつまた修正されなければならないであろう。

本報では, 以下にみるように症例Mをとりあげ, われわれの視点を明確化する一ステップとすることにした。本症例は, 前報で打ち出した所論の方向性を明らかにしうるケースでは必ずしもない。きわめて治療的援助のルートに乗りにくい, しかし社会の中でかなり潜在しているケースであると思われる。一寸非行がかり, 学業からドロップ・アウトしやすい, それでいて現代青年の特徴的な一群を形成しているケースで, いわば現代高校生一群の“声なき大衆”のひとりとしてのモータルなあり方を示すといっても差し支えないであろう。診断的にも“思春期危機”とは言えない, 漠然とした様相を呈している。かといって決して無視しえない存在のケースである。われわれは, 本症例がこのように明確な診断カテゴリーに入りにくいけれど, 先の所論にいう“3つの視点”

で, 大なり小なり問題を含んでいるという本症例に, たまたま臨床的に出会う機会をもったのである。

本症例を選定した基準は, しかし今後のわれわれの展開のために, つぎのような5つの視点に比較的よくマッチしていることを明らかにしておきたい。一個の青年の人生途上での危機ないし岐路が明確にあらわれる「臨床的出会い」をもった本症例M君(ならびにその家族)は, 1) 現代の社会的教育的状況の影響を, 直接あるいは間接に被っていること。本症例では, それが登校拒否, 家庭内暴力, さらには暴走族予備群の問題として露呈してきた。2) 継続的に治療や指導を受けに通ってきたものであること。われわれの立場は, 前報でも明らかにしたように臨床的援助を継続的に行なうなかでの研究である。その過程での人格変容をも含めた全体的把握をねらっている。相手に役立ちながら, こちらの側の視点も明確にできることとして, この第2の視点は重視する。本症例は, この基準にも合致する。3) 危機化や問題化の過程における病理的行動のメカニズムや要因が, 比較的明確なものであること。本症例では, その生活史上, いくつかの要因が浮き彫りにされる。4) 現代青年の特質なり, 問題点と連続しており, さらに社会や教育の課題と密接に関連していること。本症例は, 現代青年のもつまざまな特質一内的人格発達・成長の未統合性, 消費文化への耽溺などをもっていったことが挙げられよう。5)

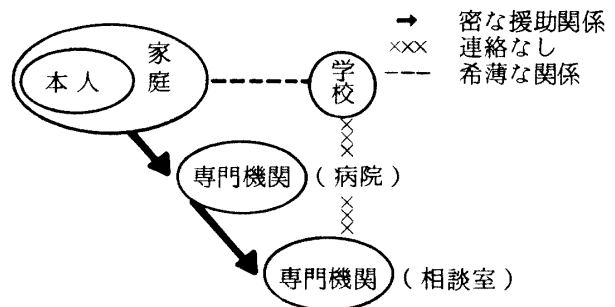


図1 本症例における援助システムの図式化

- 1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)
- 2) 医療法人生々会松蔭病院
- 3) 名古屋学院大学
- 4) みなみ子ども診療所発達相談室

教育指導や援助的活動のシステム化が可能であること。われわれは、本症例における援助的活動のシステムを図1のモデルとして提示できると考えている。来談時の状況を図式化すれば、上記の図のようになる。かかるシステムをいくつかの種類化し、指導実践の手がかりを提供することも狙っている。(田畑)

Ⅱ 症 例

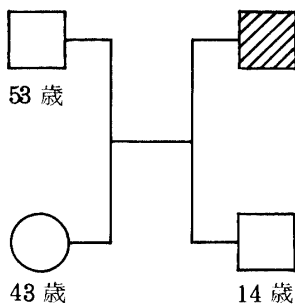
1. 症例の概要

症例 M. M. (男子) 来談時年齢16歳11ヶ月

1) 来談経路 O医療刑務所のB先生が某年7月29日に来所し、K相談室員が事情聴取をする。某年7月31日にM君と両親が来談し、M君にはI相談室員が、そして両親にはT相談室員が面接する。

2) 主訴 子ども(M君)の問題—現在高校を一年で退学し、家でブラブラしている、今後の本人の指導をお願いしたい、ということであった。

3) 家族構成 両親、M君、弟の四大家族。



父親—N大学高等工学校卒。自動車の部品製造工場の検査部長、痩身で物わかりのよい“オヤジさん”の感じ、しかし“権威のない父親”といったイメージではない。いかにもエンジニア風の語り口

で、面接場面では子どものことで何でも思い出したままをあげすけに話していく。父親36歳の時の子どもがM君で、奥さんと比べると年齢の相違上、当然とはいえ、やはり年とっているという印象が強い。

母親—高卒、主婦、中肉中背の婦人という感じ。理知的で、生气はある。面接場面ではどちらかと言うと御主人が発言をした後で補足している態度がみられる。

本人—私立高校中退。言い出したらきかないところがある。当相談室に来る前の日に、友達と約束したことが出来ないと言って家を飛び出した。その反面、人格的に未成熟なところがあり、母親にピッタリくっついて依存的になることもある。家の内と外で態度が変わり、外に対してはとて威圧的になる。一時、千枚通しを持ち歩いたことがある。しかし内心は小心でビクビクしている。“男らしさ”に乏しいところがみられるが、自分を強くするために少林寺拳法で自己訓練しようとしている。

弟—中学2年生、身体的に虚弱。兄の問題が起って多少無気力になり、母親に対して「兄ばかり可愛がる」と

ひがみ始める。兄から暴力をふるわれ、母親に「兄に逆らわないように」となだめられている。

4) 問題の発生と経過

某年11月：O市の私立高校に通っていたが、「学校をやめたい」と言い出す。父親によるとその理由は、次の3つである。①先生の態度が気に入らない。②校則が厳しい。③友人がいしめる。その後、家で家財をこわしたり、母親や弟に暴力をふるうようになる(八つ当りの行動、アクティング・アウト的行動)。朝、家を出ても学校へ行かずに、引き返してきて家にいたり、試験を受ずにいることが見られる。

翌年1月16日に退学する。一両親、担任、本人で話しあい、ひとまず休学を勧めたが、本人は嫌がり次第に乱暴になったので退学することになる。その後、「県立高校を受験したい」と言い出すが、親しくしている友達のところへ行き来するか、深夜までTVをみたりしてブラブラしている。

その2月、母親がひとりで病院(精神科)へ相談に行き、3月23日、本人同伴で病院へ行くことになり、投薬を受ける。その頃、県立高校の受験直前であったが、首が廻らなくなって結局、受験できなかった。病院での処置—脳波で後頭部に一寸異常波が出た。担当医には「脳波はたいしたことない。病気よりも育て方が問題で、感情が伴わない。本人の建て直しが必要である」と言われる。月2回の投薬を受けているが、あまりかんばしくない模様。母親は7月からは病院へ行っていない。

5) 初回面接時のM君の行動と印象

両親とM君を待合室へ案内して控室にいと、「お水ください」と言ってM君は身をかがめながら控室に入ってきて座る。I相談室員は少し驚きながらもコップに水を入れて渡すと、「お兄さん学生さん?」「お兄さんいくつ?」「あの部屋は何?」等と話しかけてくる。両親とは別の面接室へ誘うと抵抗なくついてくる。背は高くほっそりとやせている。水色と白の横しまシャツに黒のズボンとくつ下。髪はきちんとパーマをかけセットしており、額と眉毛の両端が少し剃られている。言葉使いはていねいで大人びた受け答えをするが、時々三河弁が入る。気取りがうかがえる。Co.には親和的で、関心を示している様子である。知的には、平均知の下の程度か。

6) M君の性格特徴

面接時の印象と両親の情報から次のような性格特徴が認められた。自己中心的な依存がある。親和的だが、被暗示的。劣等意識ゆえの虚栄と小心ゆえの虚勢。

7) M君の来談意欲

来たら来たいが、名古屋はまだチンプン・カンブン。

父親と一緒に来る。ぜひとも来談したいほどのモチベーションはないが、事情が許せば来てほしい程度の関心はある。

8) 家族の希望・期待

両親の意向としては、本人の現在のようないろんな生活状態——学校へ行くでもない、かといって働くという具体的なあてもない状態——をなんとか抜け出せるための指導的サポートを講じて欲しい、そのためには、本人同伴で、車に乗って本人とともに来談したいと感じている。

9) 来談時における総合所見

イ. 病院で投薬を受けているが、母親へのガイダンスだけでは、母親も不満足である。本人の医学的検査(E. E. G. に slight abnormal の所見があること)の結果をふまえて、本人への生活指導にも配慮した接触が必要である。

ロ. 全体の印象として、本人のパーソナリティ発達での未成熟さ——母親に依存的、小心であること、恐怖心が強いこと、外界への威圧的虚勢を張ることなど——の克服が主要課題であると考えられた。

2 M君とのカウンセリングの過程

1 回目(7:31) <話題>①(どういうことで来たの?)

悪いことばっかりやって暴れん坊。そこらじゅうでケンカやったり、家で暴れるもんで親が困っている。ハタから見ればとろいこと(たとえば、眼と眼があった)でカッと怒れてしまう。②高校は中退した。いつまでもフラフラしておれないで、早く働きたい。事務みたいにゴチャゴチャやるより身体を動かす方が好き。技術をつけたい。親は身体を治してからでも遅くないと言う。③首がつっちゃったり、身体がだるくなる。針灸に週3回通っている。④高校は1年の3学期直前でやめた。“すごい学校”で怖い。先生にでも殴りかかる。暴走族の副官がおり、ファンタのピンで殴られた。学校の方針も嫌だった。入試の成績でクラス分け、いいクラスになったが、ぎゅうぎゅう押しつめ、夏休みの補習も半強制的。途中で抜けて喫茶店でさぼった。クラスによって先生の態度が違うので、それが生徒には“ひがみ”や“ひげ目”になる。(自分が進学クラスであったことを話す時は少し得意気である。)2学期になって登校するのが嫌になり出し、授業中は寝ていることが多かった。1学期の成績は人並み。2学期になると“落ちこぼれ”が多くなる。親や担任は、学校をやめてほしくなかったが、俺自身行く気がなかった。勉強自体が昔から嫌い。中途半端なことは嫌いだから、思い切って中退した。⑤行ってる時は嫌だったが、やめると行きたいなあと思う。なんか自分だけ取り残さ

れてヤな感じ。今の世間が、働く面でも学歴で差をつける。TVみたり、レコード聴いたりして時間をつぶしてる。起きるのが午後12時近い。“墮落した生活”になっちゃってる。⑥再受験しようとしたが、首がグーンとつって嫌になり、みあわせた。病院で脳波をとった。時々首がだるくなる。⑦少林寺拳法を去年の10月から始めて、今3級。週3回、電車で通う。理由は、⑦強くなりたい。⑧おちつきがないので規律づける。⑨発散したい。(ちょうどブルース・リー・ブームで入門者が増えていた)服装、髪型、指輪に文句がうるさい。いろんな年代の人がおり、話しが合わない。⑧今一番考えたいのは、⑨どういう仕事に合っているか、⑩身体を早く治したい、の2つ。<印象>事例の概要で記述した部分もある。本人が現われるかどうか五分・五分だった。両親の受面接が終わるまで控室でカン・コーラを飲みながら、高校生のヘアスタイル、ファッション、バイオレンス、女子高生の性行動について機嫌よく話す。若者文化の一端に驚くとともに興味もわく。同じ少林寺拳法をやっている仲間という親しさ。3千円でセットしたヘアスタイルとバーゲンで買った靴下(3足で100円)の取り合わせが、おもしろい。“墮落した生活”というなかで、少林寺拳法に通っていたり、言葉の上だけでも「働きたい」と述べているのは、救い。話しの口調や内容には深刻さを感じさせず、日常生活上の助言なり、指導をある程度与えた方が適当ではないか。ひょっとすると“拳法療法”をやることになるかもしれない。

2 回目(8:28) 父親と来談する。

<話題>8:3~8:5, 友達二人と内海へ遊びに行った。1日泳いで、雨が降り、2日間ゲームセンターで遊んだ。家から1万2千円出してもらおう。②TVをみたりラジオをきいたり、友達の家へ行ったりして、夜2時頃に寝て昼近くに起きる“逆の生活”が続いている。夜眠くならない。父さんは、“生活の逆”をなおすように言う。③針灸師は、「良くなった、後は気持ちの持ちよう」と言うが、自分としてはそれほど良くなったかどうかははっきりしない。ひとりですると首がだるくなり、肩がこる。何かやってると感じない。④少林寺拳法は弟と一緒に始めたが、弟は身体の無理をして今はやめている。⑤夏から小屋でニワトリを飼っている。お宮の市でヒヨコを2匹(1匹50円)買ってきた。母さんは、ニワトリや犬が怖い。⑥仕事のことで、給料やその他色々言う、父さんに、「高望みすぎだ、3年間は我慢するように」と言われてしまう。⑦家族で食事するのは、日曜日ぐらい。普通はバラバラ。ひとりで食べると味気ないし、オカズも多くなる。一緒に食べるとオカズも少なくてすみ、うまい。⑧中学校の時に比べて体力が落ちた。中学

時代は陸上部とサッカー部に属して熱心にやっていた。町内マラソンにも出たことがあり、サッカーも運動場を走ってばかりいた。

<印象>前回と同じ横じまのシャツ、バミューダー、白に横じまのソックス、ブルーバー(クツ)。髪はドライヤーできちんとセットしてある。前回よりも少年っぽい感じを受ける。ヒヨコを飼育する心優しさ、中学時代にマラソンでかなり鳴らしたことに、新しい側面を発見したようでいささか驚く。それだけに家族や仲間と生活のリズムが違う現在のM君の心淋しさが感じられる。首のたるみや肩こりも、心身症的要素があるのではないか。“生活の逆”が元に戻ると、違った面が現われると思われたので、「家族も協力してくれる様子だから、明日からでも早く起きるようにしてみたらどうか、最初はたいへんだが、数日ががんばれば身体も慣れてくる」と支持する。SCTを、「やってきてくれないか、無理にやる必要はない」と渡すと、「どんな仕事に向いているか、これでわかるか」と聞く。Co.は「これを手がかりにして二人で考えて行きたい」と話す。

3回目(9:11) 父親と来談する。

<話題>①来る途中、“ねずみ捕り(スピード違反)”につかまる。②夜はかなり早く寝るようになった。朝起きる時間はバラバラ。父さんに起こされて眠はあくが、身体がいうことをきかない。昨夜は眠れず、蒲団のなかで深夜放送(キャンディーズのオールナイト・ニッポン他)を聴いた。5時から大学受験講座が始まり、「これはあかん!」と思って寝た。仲々思うように眠れない、起きれない。③連れ(友達)の話。S君は調理師学校へ通っているが、遊びに行ってる。カバンの中に何も入っていない(半ばけなし、半ばうらやまし気)。H君は高校へ通ってる。④高校も2学期になると、勉強用具も持たずに行き、学校内に隠しておいた。良い科目(現国)と悪い科目(数学、化学)の幅がひどくなった。白紙の答案(古典、数A)を出し、呼び出されたが、「書ける。だが書きたくないから書かない!」と言い切った。試験や課題提出もさぼった。もう学校をやめたかったから。クラブ(地理部)も気が向くと行ったが、単位のため。文化祭にも一応出したが、「なんか紙がぶらさがっちゃうようなもん。そんなもんだで、誰も見にこうせん。」たるいようなこと。体育祭でも、途中で逃げださないように3年坊が、ズラッと門で見張った。⑤仕事をやりたい。仕事をやりたいなあと言うだけで、後は別に考えてない。H君と夏休みにバイト(ビルの掃除夫)をやるつもりだったが、ダメになった。バイトの経験はない。⑥道院(少林寺拳法の道場)に、「嫌な奴がいるけどネ、好かんちゅうか。俺と合わんちゅうか。細かいことをい

ちいちうるさいだら。ゴチャ・ゴチャ言う奴は、好きじゃない!」拳法は続けるつもり。⑦針灸師のいいかげんさへの憤慨。「なにかと都合つけて休む奴!、チョッ・チョッと7.8分やって1500円。だいたい金もうけるだに」<印象>黒ズボンに白いシャツ。カール・アイパー(髪型)も徐々に崩れてきた。話しに今ひとつ乗らず、アンニュイな否定的・攻撃的表現が多い。表情・態度や語調にも精彩がない。面接の終了間際にSCTを丸めて出す。現在の状態や在学中の態度からしても、「言ったことを確実に実行しにくいかな」と思っていたので、「よく書いてきたネ、負担にならなかったかな」とCo.の『嬉しさ』を伝える。次回は、SCTの内容についても話すことにする。終了後に田畑Co.から『昨夜遅くまでSCTを書いていたこと。父親に相談したが自分でやるように言われたこと。母親がノイローゼ気味で実家に帰り、弟がその代理をこなしていること』を聞き、いささかショックを受ける。それらは面接の中で話題とならなかった。どうして家族の危機的な話題に触れなかったのか。少し腹が立ったCo.。危機的な家族の話題にも触れず、ましてやM君自身の現在やこれからのあり様の探究へと深める様子もなく、高校時代、連れのこと、道院や針灸師への腹立ち、という過去の、表層的な話題へ主要な関心が向いていると思われる。こうしたことはある程度予想していたが、やはり卒直な自己表明が十分になされていないのではないか。M君側の要因もあるかもしれないが、面接の場づくりが、そのような雰囲気になっていないのではないか、という焦りにも似た気持ちや反省が湧くCo.。

4回目(9:25) 父親と来談する。

<話題>①今日は針に行ってきた。「胃腸が悪いネ」と言われた。あまり胃腸は強くない。②今週からひとりで早く起きるようにしている。11時頃に寝ている。③仕事をやるかもしれない。蒲団の乾燥か掃除車、バキュームカーの掃除。「なんでもいいから働きたい」一週間ほど前から何か仕事がしたくなった。身体の方はもういい。「やりたい」金をとりたい。早く起きるようにしているのも、仕事の時起きれないと困るから。家にいてもやりたいことがなく、TVをみてるだけ。これまで不規則な、ひどい生活。そんなことは前からわかっていたが、パッと直せなかった。働きたい気持ちが強くなってから直してきた。④連れ(S君とH君)とは遊ばなくなった。これまで「来んか」と電話があると、誘われるままに行った。遅くまで話したり、泊ったりした。深夜、カブを乗り回したり、色々と悪戯もしていた。⑤SCT注)につ

注) 時間の都合で、SCTの質疑応答は、前半だけで打ち切るようになった。5回目の面接の時、後半をやる予定

いての質疑応答。⑥タバコは中学時代から始めて、高校で本格化。家でひとりだから口にくわえているとなんかいい感じ。ケント、ラーク等色々吸ってみる。今は1日にセブンスター2箱。軽いのにした。父さんもタバコをたくさん吸う。吸わないと手が震える。

〈印象〉赤の格子じま入りの半ツデシャツに黒ズボン。玄関でタバコの火をもみ消す。車の中で寝ていたと言っていて、最初は眠そうな表情や仕草であった。が、やがて「朝早く起きています」「なんでもいいから働きたい」と話す頃には、前回とは別人のように、表情や態度が活き活きとして、語調にもはじけるような力強さを感じられる。今までで一番良い表情のM君。先回のCo. 自身の焦りやいらだちを吹っ飛ばしてくれた。何かの仕事に本格的に取り組もうという意欲に満ち、期待で心に快い緊張を感じられる。Co. の心もわくわくしてくる。

5回目(10:9) 両親と来談する。

〈話題〉①母さんの知り合いの紹介で、今週から蒲団の乾燥の仕事に出ている。やることは簡単で、すぐ覚えれるが“えらい”。通勤に自転車です30分かかり、仕事前に足が疲れる。でも“わがまま”は言えない。仕事が“えらい”と言って休めない。メンがよく食べるし、うまい。②親もまずは安心している。仕事を始めたことは連れも知っていて、電話をかけてきて「2,3日でやめへんか」と冷かされた。③仕事仲間は、30歳以上が多くて最年少。乾燥車の助手席にいる。乾燥する前後の蒲団の違いに驚く。車の免許があり、何軒もの道順を覚えないと一人前じゃない。まだ『半人前』。④仕事仲間の話を聞いていることが多い。口をさきむと恥をかく。65歳のおじいさん(最年長者)とはわりと話す。⑤原付の免許が、欲しい。仕事に出るようになって本当に欲しくなった。でも当分は試験を受ける余裕がない。ある程度仕事に慣れて、それなりの信用を得てからでないと……まだ5日間ですばりやすい印象を持たれるのはどうも……。口実をつくるなんてのは、嫌。⑥親ばっかにやらしてもえらい。お父さんも、もう今にじじいだし……53歳、子供のわりには高年齢。母さんとだいたいひと回り違う。長男と言っても、自分の好きなようにしておればだいたい良い。父さんも長男だったが、いままで好きなように、気ままにやってきた。

〈印象〉約束の時間が過ぎても仲々現われないので、先回の意気込みも、一時的なものであったのかと気をもむ。しかし15分程遅れて、黒のブレザーに黒ネクタイを締め、

であったが、話しの流れのなかで、SCTを持ち出すことは、不自然な、その場にそぐわないものとなっていったので、以後SCTを面接の場に持ち込んでいない。

パリッとした姿で現われたM君を一見して、「身も心も引き締まっており、仕事をしてるな」という直感があった。今週の月曜日から仕事に出ていると話す時、例え「えらい、えらい」を連発しても、活気にあふれ、本当に打ち込んでやっているなというたくましい気迫と充実感が、身体全体から感じられた。生命感の流出。そんなM君を味わう。父親のことを想いやる余裕にも驚く。本格的にM君なりに動き出した、そんな確かな手応えが感じられる。ここしばらく持ちこたえることができ、テイク・オフ(take off)できれば、自分でフライト(flight)して行けそうである。活き活きしている人間を見ることは、会うことは、こちら側を気持ちよくさせる。M君は、調子がいい。Co. は、これまでM君を何かあぶなっかしいものと見ていたところがあったが、もっとM君を信じてもいいんじゃないかと思う。

6回目(10:23) 母親と来談する。

〈話題〉①仕事に慣れ、だんだん気が楽になった。初めは緊張した。慣れたと言ってもやっぱりえらい。帰宅すると緊張と疲れで、ホッと横になる。前は「ゴロゴロしなさんな」と言われたが、最近は言われない。疲れていて、あんまりゴチャゴチャ言われると怒れてくるので、「疲れているから、まあいいや」と察してくれている。②夜、3人(本人、母親、弟)で食事をしている。仕事で遠くへ行く時は、どこへ行くか、どれぐらいで帰れるか、話してる。母さんはあまり心配していない。その理由は、①ある程度ボクが大きくなった、②付き添いの人がいる、③仕事が危険でない、から。③わがままがちょっとずつおさまってきた。怒れてもケンカができなくなった。気持ちを押える必要がわかってきた。仕事先でも男の人は冷たい。上司から冷たくされているのか。おばさん達は手伝ってくれる。歳は一番下だが、背が一番高い。高いところへ蒲団を載せるには便利。④ひとつの仕事長くやるよう励まされているが、今の仕事をあまり長くやるつもりはない。最低一年はやるつもり。仕事して金をもらうのは初めてで嬉しい。でも金をとるのはえらいなあ。使うのはいいが……。金のことはルーズな方だが、金をとるようになってケチになるかもしれない。金をもうける苦しさを知らずに使った。⑤「学校より楽じゃないかな」と思ってたが、今は「ああ楽じゃない。学校はいいなあ……」と思う。今さら学校へ行く気は全然ない。親は行かせたいと、まだ思っているみたい。勉強自体が嫌い。先生の話もたると……。中学校の時はよく遊びで、よく学びの方はせんかった。⑥素行がよくなく、⑦落ちつきがない、⑧自分に甘い、⑨ねばり気がない、と先生に言われた。好き嫌いがはっきりしていて、嫌いだと徹底的に反抗した。「結局、損するのは自分。後悔す

るのは自分だ」と言われたが、「そうかな」程度。後になって「ほうだなあ」と思った。いやらしいことをやられたもんで頭にきた。ボクを良くしようとする先生の好意だったが、俺自身が反対に感じちゃった。もうひとりの子も叱られたが、意地になっていっしょうけんめいやった。その子よりボクの方がだいぶ良かったが、結局最後に負けた…。ボクには結局意地がなかった…。⑦高校はおもしろくなかった。小・中学校の頃は、勉強はたかったけど、それ以外のことがおもしろかった。働く今では、あのおもしろさは無理じゃないか。仕事を終えて帰る時、「ああ、やっと終わった」という感じがいい。楽しい。今は、仕事しかないみたい……。

<印象>黒のセーターと黒のズボン。顔に少し疲れがうかがえる。過去のモヤモヤ、イライラをふっ切り、この仕事だけは精いっぱいやるという感じを受ける。今の自分に賭けてる感じ。よく頑張っている。帰宅する途中の「ああ、やっと終わった」という実感がよく伝わる。職場の厳しき、学校、そして家庭内の対比が興味深い。今の仕事が持続でき、達成感なり自信なりが、芽生えてくれば独力でこの先、切り進むことが可能であろう。仕事をするなかでM君が何を感じ、考え、何を出してくるか楽しみである。

7回目(11:6) 母親と来談する。

<話題>①給料をもらった。父さんに1万円、母さんに2千円返した。なんでか知らんが返すように言われた。使うのがだんだんおっくうになる。しぶちんになる。欲しかったレコード(タニー・ア・タッカーのHello Mr. Sunshine)を買った。小遣いはもらわず、自分がかせいだ金でやっていきたい。②職場での話し。運転の仕方が人によって違うこと、同じことのくり返しで、腹がへったり、眠くなると嫌になること等 ③一週間が速く感じる。家でゴロゴロしていた時は、長く感じた。今は速く過ぎて欲しい。早く18歳になり車の免許をとりたから。一度、トラックに乗ってみたい。上から下を見おろすので気分がいいし、ぶつかっても安全だから。④今の仕事は、“^{からだ}身体慣し”。身体の調子は良い。将来、どんな職場につくかは、今の仕事をやりながら決めたい。運転免許をとったら運送屋でもと思う。「陸運したいヨ」と父に話したら、「ふ〜ん」と何も言わなかった。「なんでもしてください」という感じ。⑤(よく頑張ったネ)「続かんじゃねえの、今までの経歴からして」とH君に言われたが、一週間ぐらいで自分でも「行けるなあ」と思った。みんなから「長く続かないとあかん」と言われて、こちらでも「やらなあかん」と意地になった。18歳まで今の仕事をして、免許をとって好きな仕事へ…という計画はある。⑥弟の話し。野球部に入っているが、仲

々正選手になれない。「チビだし、やめとけばいいのに色々と考えとらさせる」 ⑦暇な時は家で横になっている。TV かレコードか漫画、本は字が細かいから読まない。レコード：ロック、フォーク、「バラバラなんだワ」(オリビア・ニュートン・ジョン、キーン、ベンチャーズ、ユーミン、中1：サイモン&ガーファンクル、中2：ベンチャーズ、中3：ビートルズ、高1：スージー・クワトロ、今：タニー・ア・タッカー)。漫画：嗚呼花の応援団、⑧父さんが、今日、胃潰瘍で入院した。手術はしない。

<印象>黒で統一したセーター、ズボン、クツ下。中央がアップした髪型。30分程早く着いたと室内で待っている。今回は初めてひとりで来談した。居心地が悪そうで落ち着かない様子 of 母親に比べて、M君は不安や心配そうな表情をみせず座っていた。少し眠そうに顔を手でふく。順調に仕事に取り組んでいる。それなりの計画も考えており、今の仕事が長く続きそうな手応えを感じる。心おきなく卒直に話せている。来談については、「起きるのがおっくうだが、悪い感じは持ってない」とのこと。

8回目(11:20) 母親と来談する。

<話題>①父さんはまだ入院中。食事療法、くっさいようなメシ。見舞いにはまだ行ってない。今日行く予定。②弟との対比。新人戦1回戦で負けた。補欠にも入れず“たるい”と言って帰ってきた。弟は、他人の眼や言動を気にする。字でも小さい。ボクは字も大きいし、他人が何を言おうと構わない。他人の眼を気にしている弟が最後には怒れてきたり、かわいそうになってくる。俺からいじめられ、両親から文句を言われてこうなったのか。身体も大きくなり、家では反発もするが、外へ出るとあかん。ボクは家の内でも外でも同じようにふるまう。野球部も、「やめたい」と言いながらダラダラやってる。嫌ならやめればいい。昔のボクみたい。③弟はまだ進路を決めてない。親は進学して欲しいが、口には出さない。本人の好きなようにさせる。本人(弟)はまだ遊びの方に興味がある。ボクも2年生までは、「よく遊び、よく寝」だった。④(母さんが実家に帰ったと聞いたが…)ボクとか弟が、蹴ったりしていじめるもんで疲れたんじゃないか。静養。どうしても頭にきて口よりも先に手が出る。ボクは、最近しなくなった。母さんが居ないと不便、インスタント物で味気ない。母さんも辛いことがあると思うが、口に出して言わない。⑤ボクには、たいして期待してないんじゃないか。どっちかと言えば、母さんも中途半端が嫌いだもんで、元気でいっしょうけんめい働いておればいいんじゃないかな。それ以上望まないんじゃないか。⑥(この相談室に対してはどう?)母さんは、何か得ようとしている。父さんと話しても、ない

ことが、ここにはあるかもしれない、専門家だから。ボクが何話しているかは関心があるみたい。(M君自身はどう?)あまりわからんなあ。深く考えたことないネ。母さん達みたいに言いにくい。困っていること…強いて言えば、金がない。もうしばらく来て話したい。

<印象>散髪に行き、サッパリした様子。働くことで自信をつけたのか、リラックスして落ち着いて話している。自分と弟の対比から違う点と同じ点を述べる。弟への批判ばかりでなく、思いやりも示す。自分と弟が母親にしたことを反省し、母親の立場や気持ちにも言及する。余裕がでてきたことが感じられる。来談の意義は不明確。

9回目(12:11) 母親と来談する。

<話題>①12月は仕事が追い込みで、土曜や日曜にも仕事が入ってきてたいへんになる。②まだ“半人前”だけど、助手のボクが乗っていないとたいへんな場所が多くなっている。2, 3回シーツの数などをまちがえたことがあるが、仲間の人は、「まちがえるなヨ」と言うだけで強いことは言わなかった。③父さんは顔のでき物もとれて、前よりも健康になった。ボクにも注意をしなくなった。中学校の時も「勉強しろ」と言わずに、好きなようにやらせてくれたが、「男だったらもうちょっと静かにしとれ」とか「静かな男にならなあかん、男が女みたいにチャラチャラ言うもんじゃない」と言われた。小さなことにこだわらない、大きな人間になって欲しい。「そうだな」と思う。男だったらドシンとして、“黙ってサッポロビール”。④17歳じゃあ…まだ働いたばかりで無理。30~40歳の大人には勝てん。話しの内容、働きぶり、人との接し方、仕事の段どり等違っている。でも、いっしょうけんめいやるしかない。⑤父さんは、「ああせよ、こうせよ」と言わずに、本人に決めさせる。自分もひとりで好きにやってきた方だから、どえれえ苦勞してきた。身体は強い方じゃないが、やり出したら絶対やめんちゅう意地があった。男だもんネ。自分の苦勞、子供にして欲しくないんじゃないか。口には出さないが、学校へ行って欲しいみたい。でも、勉強が嫌いな者が、学校へ行って遊んどったら捨て銭。アホらしい、とろくさい。金を捨てるより働いてもらった方がよい。頭で勝てなければ、身体で勝つ。⑥ボクはボクの好きなようにやる。ボク自身がちゃんとしとればいいんじゃないか。学校へそう一日行けとは言わんんじゃないか。認めてもらうんじゃなくてネ、認めさせる方じゃないかな。まだ働き出したばかりだしサ、これから仕事をしっかりやれば、信用してくれるしネ、多分。

<印象>「どうもありがとうございました」といねいにお辞儀をして相談室を出る。黒に白と茶の横じまが入ったセーター、グレーのストラックスにはきちんと折り目

が入っており新調したようである。職場では半人前だけど、存在価値が認められており、それを踏まえていっしょうけんめいやるしかないという自覚がある。『父親=男』讚美。最後の「認めてもらうんじゃなくてネ、認めさせる方じゃないかな」という発言にハッとしたCo。「あわよくば復学を」という親側の思惑が引っかかっている自分に気づかされて、M君にすまない気がした。この発言は、親に対してだけでなく、Co.自身に向けられたものと思われた。Cl.が選んでくるものをそのまま認めてやるのが本来的なあり方なのに、それをある方向へ引張っていく動きはしないまでも、認めるのをしぶってた部分がある。このM君の発言によってCo.は、スッキリした。親の期待を知りながら、あえてそれとは異なる自分の道を選択し、歩き始めているM君を、親にアクティブに認めさせていこうと言う。たくましくなった…。その力強いM君の姿は貴いものと思われる。そのM君の姿勢を大切に見守って行きたい。

電話連絡(翌年、1:24) 1月22日(土)に予約したはずであったが、本人も親も来室せず。連絡もなかったので、1月24日に電話を入れる。母親が出て、明かるくて元気な声が返ってくる。「当日は来室する予定にしていなかった。本人(M君)は、仕事に行っていた。本人が会社を仲々休めず、元気でやっているのではしばらく様子をみて連絡するつもりでいた」とのこと。

電話連絡(2:10) 母親より電話が入る。「次回は2月12日にうかがう予定だが、本人は出勤するためにいけないので、親だけがお邪魔したい。」

M君が来談しないのは、会社の事情もあるだろうが、もう本人なりに動き出しており、仕事を休んでまでも来談する必要を感じてないのであろう。Co.もM君が来談しないことへの不安はない。すでに確実に動き出しているM君が、ひとりで十分にやっていけるのを見守りたい。

10回目(4:9) 父親と来談する。

<話題>①遠くへ行きたい。家を出たい。食ってけれんか知れんけど、ただ出てみたいだけ。タリ〜もんで、あんまりおもしろくねえ〜もんで、遅かろうが早かろうが、いずれ外へ出てかなあかん。S県の叔父さんに仕事をたのんである。父さんは「やってみるだネ」と言ってる。②仕事にはずっと行ってる。土曜日も行ってる。甘ったれたことは言っとれん。年の功には勝てん、仕事、給料、信用の面でも倍働いても勝てん。働き盛りの人が多いので、ついていくのがたいへん。仕事仲間が歳上ばかりだもんで、つきあい(酒、ビール、言葉使い)が違ってくる。③原付の免許は1月にとった。モンキーを改造して乗ってる。購入費や維持費は給料から出している。

食費に一万円入れて、弟にも小遣いをやってる。あとは好きな様にやってる。連れに呼ばれてマージャンやったり、単車で走り回ってる。④弟がグレてきた。野球部も正選手になれず、タリィ〜で辞めた。服装も乱れて、ケンカはするし、カバンもペッチャンコ。頭は剃りあげとる。よくないなあ…お兄さんがあまり良くなかったもんで、多分こうなった(笑)。⑤学生さんに未練がないと言ったらウソ、やっぱり学生さんの方が楽。今さら戻る気はない、もう引き退れんできあ。親は夜間でもと言うけどサ、行きたないもんで、ヤだって。自分で生活しちよるちゅうまではいかんけど、こっちの方(仕事)がいいでサ。⑥父さんは元気。会社を昨日辞めた。勝手にサッサッと辞めて、今、無職。別に詳しいことは話さない(あっけらかんとしているM君)。今まで父さんは勝手にやってきたもんで…また探すだろう。⑦今まで好きなようにやってきた。家で遊んどって、ブラブラしてるのもみっともないし、中途半端だで仕事をやって、今度は遠くへ行く…。自分の好きなようにできるのは、若いうちしかない。家を出れば、親は淋しいんじゃないか。たいした息子じゃないけど、出来が悪いほど可愛いと言うからサ。無茶は若いうちしかできんもん。⑧(今まで会ってきたことについて)悪い気持ちはせんね…。

<印象>顔色も良くなり、体格もガッシリしてきた。身体的にも精神的にも、ひとまわりたくましくなった。甘えが許されない大人の世界でもまれたことが、M君を心身ともに鍛えたようだ。「遠くへ行きたい」と言う。「家を出たい」と言う。ひとりで遠くへ行くことは、家を離れることであり、今の仲間集団から離れることである。仕事先では“半人前”と自覚しているM君には、遊戯性と冒険性を含んだ“巣立ち”の試みである。一見、はっきりした“目的なき、理由なき家出”も「若いうちしか無茶できん、好きなようにやりたい」と言うM君が、あるいは若者が、“一人前”になるために必要なイニシエーション(intitiation)なのであろう。この先どのような経過になるかわからないが、こういうことを言い出したことにはポジティブな意味があると思われる。

次回は、「もう家におらんかもしれん、家にずっと帰ってこんかもしれん」と話すので、S県へ行っている場合は手紙で様子を知らせてくれること、今の仕事をしている場合には、都合の良い日を前もって知らせてくれることを約束して別れる。

その後の経過：その後、M君は、Co.の前に姿を現わさなかった。父親の話では、S県まで行ったものの、すぐに父親にくっついて引き返してきて、今まで通りの仕事に元気に取り組んでいるとのことであった。土曜日にも勤務しているとのことであるが、Co.の前であんな大

見得を切った手前、顔を出しにくいのかと思っている。バツが悪そうに頭をかいているM君の姿が、目に浮かぶようである。

フォロー・アップ(6:25)：フォローアップのために午前10時20分頃に自宅へ電話を入れる。田畑Co.と母親が話した後に、まだ眠っているM君を母親が起こしに行く。半ば寝ぼけ声で電話に出たM君。「昨夜は、10時頃に寝た。土曜日は普通、仕事に行ってるが、今日はたまたま休み。仕事は元気に頑張っている。(もう来る必要感じてない?)」「はい」と話した後で、M君なりに元気でやって行って欲しい旨を告げて、終結にすることを確認する。(伊藤)

3. 両親とのカウンセリングの過程

1回目(8:28) 父親①:<話題>①下の子をO市(母親の実家)に2カ月位預けた。②自分(父)が本を読んでいると、本人(M君)は女房のところに行って、大きな声で「あれを買え、これを買え」と自分に聴こえよがしにいつている。理解に苦しむ。③本人は弟に謝った。いま弟とはうまくやっている。ときどきちょっかいを出しているが……。④他の友達の入れ知恵だと思いが「仕事をしたい」と言い始めた。親を試すようなことをいう。⑤すぐに親に依存してしまう。“体験”させないとダメだ。⑥本人は「首すじのところが痛い」といって自信はなさそう。⑦子どもは自分が尊重されてないと思っている。話がコロコロ変る子ども。<印象>面接約束時間の一時間前に入室し、少しでも子どもと対話を増やそうとする父親である。息子の現状を、前回(受理面接時7:31)以降の経過の中で表明する。Co.には、父親の一徹な、男っはい一方的な応待のやり方に、息子さん(M君)の方が戸惑ってしまうのではないかと、という印象がある。他方、父親は、息子を、不安定で憶病で小心に作り上げてしまったことに、気づきははじめ、反省しはじめた感じであった。(今回母親は、弟と言い争ってくたびれてしまったとか。疲れ気味な母親)

2回目(9:11) 父親②:①女房は、いま里帰りしている。自分は、男で甘く、男の子(息子たち)を放っているといわれた。本人は怒らなくなった。下の子はそうじ、洗濯、ご飯炊きをする。②本人の得点な点—TVのプロレスラーの名前、歌手ベンチャーズの名前など覚えている点である。あながち馬鹿ではない。③きのう珍しく朝早く起きていた。これまで朝起きられなかった理由を言えるようになった。④友達のおいだでは、自分の意識(=意見)なしにやっしまい、「主体性がない」といわれている。この頃、N大(相談室)に来て、学生を見て、ほろくそにいわなくなった。兄弟間では弟の

方が、友達にはリーダー格的に振る舞える。⑤目下、女房がいなく、“災難”は自分自身である。その次には弟が災難。本人はケロリとしている。⑥本人は、いま針灸に通ったりしてゴロゴロしているが、治したい気持はもっている。そして働らきたがっている。友達にも、ええかっこしたがる。〈印象〉前回と同様に、父一息子の2人で来談。目下、母親は精神的にまいってしまい、お里帰りしている。夫として、父親として何かと気苦労の多い毎日である。本人のために、辛棒しているこの父親のつらさが、比較的軽い口調の中ですすめられるだけに、Co.にはかえって重くのしかかってくる感じがした。〔母親里帰り中。〕

3回目(9:25) 父親③:①大分変化あったと思うが小さい変りよう。女房が帰った。息子(本人)が17歳の誕生日なもので。下の子が、兄の誕生日を覚えていて、何かお祝いがしなければ、と考えていたらしい。本人はこのところに来て、少し良くなったみたい。生活態度が少し変わった。怒ったときの荒れが短かく、納まりが早くなった。②子どもが女房に当るのは「外に出ても、家にいても、当れるのはお母さんしかいない」といったとか。私には外で疲れて帰るので、いわない。あの子(本人)が、私のワイシャツにアイロンをかけてくれた。「ご苦労さん、ご苦労さん」と賞めてやったら、照れくさそうにした。本人は、まんざらでもなさそうだった。③誕生日に何をかうかで悩んだが、手で組み立てる「オートバイ」を買ってやった。私の手を引っ張って、それをみてくれという本人。④女房も以前より、ピリピリしないで疲れなくなった。女房も楽になったようだ。⑤N市の針灸診療所で、小さい子を軽くあしらって、ピリピリしなくなった息子。行く道で、千枚通し(護身用)も持たなくなった。⑥下の子が上の子に手厚くするので、ひがみっぽくなった。兄には服でも新調のを着せ、下の子にはお古で我慢させていた。⑦本人は、そろそろ外で働かせたい。しかし本人は自分から探そうとしないようである。仕事につかせたい理由——いままでと怒りが浅くなったこと、朝早起きができるようになったこと、自分で金をかせぎたい気持がでてきたこと。“蒲団干し業”を、女房の関係で当ってみてあげようというところがある。⑧ただ頭髪は、あのスタイルでは困る。少林寺拳法の場所でも以前注意されたことがある。〈印象〉父親は息子に働きたいということに応じよう、という気持になってきている。息子自身の変化を認めてきつつある父親である。ただし、父親は、子どものしごとをトライアルなものというふうに受けとめている。父親は、この一か月間、自分が“気狂い”になりそうだったと述べているように、Co.には母親不在でよく辛棒し、「父一子で—

心不乱の努力に“つらかったでしょうね”という気持を伝達した。〔母親帰宅、本人投棄中止中〕

4回目(10:9) 父親④, 母親①:①息子は半分落ちついた。手を挙げるのも、月に1~2回くらいに減った。2週間くらい前から投棄をやめている。1週間位前から早起きをするようになった。②下の子がいびられ、なるべく兄の目の前から遠ざけようとしている。兄は「俺のようになるな」と激励するが、その仕方がかえって唐突である。抑さえつけられた不満をぶっつけ始めた弟。③上の子は、オートバイを買いたいといい出した。働らき始めた自分を主張する兄。勉強し、高校再受験するふうのない兄、仕事を自慢する兄。〈印象〉久しぶりに来室した母親の表情は穏やかである。両親とも交互に、息子たちの話を卒直に述べる。Co.は家族の人々の苦労に敬意を表したい気持であった。本人(M君)は、いまが仕事をはじめ疲労も重なり、シンドイ頃であると思われる。父親も、子どもの仕事のつらさ、厳しさを考慮し、いまが親にとっても我慢どきという感じをもっている。Co.も、見通しの明るさとともに、本人を家族の人たちが支持していくこと、そして本人に自信をつけさせることの方角を明確化して伝えた。〔本人、今週始めから、蒲団貸業に仮り雇いの身分で勤めはじめる。母親は、病院での投棄名を手帳に写してくる。〕

5回目(10:23) 母親②:①あれから本人は変りないが、言うことがしっかりしてきている。雨降りの日、仕事に出かけるとき、一寸ごねる。生活の節制は良くなった。②主人は、胃の検査で胃カイヨウが発見され、小指の先位大のもので大したことはないが入院する。子どもたちに言いきかせる意味もあって、入院する。③本人は所長にも「よく口を利き、挨拶もよくやる」と受けがよい。オートバイのこと、免許のこともいわなくなった。本人も別に必要でないようである。④この頃、以前の友達3人から電話がかかってくる。「断ってくれ」という。「なぜ?」ときくと「何も彼らから得るものがないから」という。自分からはっきり言う言わない。友達に呼び出されて、断り切れず出ていったが、すぐ戻ってきた。意志薄弱なところがあるくせに、変な強情っ張りである。(奥さんの気持は?)あの子が働らきに行くようになって、イライラが楽になった。しかし、いま私(母)と下の子とが緊張した感じである。弟は、兄によくしたのでひがんでいる。(M君の進学は?)まだ未練はある。本人は「高校を2年遅れるのはイヤだ」といっている。本人にやる気があれば、「夜間」という方法もある。〈印象〉息子も、仕事に行きだして、節制が守れるようになり、落ちつきがみられるようになった。母親にも安定感や落ちつきが伺える。Co.には、ただしこの一家の緊張

が、いまご主人(胃カイヨウ)と弟(嫉妬)に現われ、特に弟は抑制していた“我まま”を、母親に対して示すようになった。一家が規則正しい生活に邁進し始めている様子は、よく伝わってくる。Co. は家庭の雰囲気には少し緩やかなものを感じることができる。(父親は胃カイヨウで入院予定である。))

6 回目(11:6) 母親③:①先々週、当相談室から帰って、弟に突っかかった。弟を立てて、イスで頭を叩いた。カーッと became したようだ。テンカン剤をやめたので、その影響かと思った。②主人は今朝入院した。本人は知らん顔して寝ていた。今日、主人の入院と一緒に連れ出そうとして誘ったが「うるさい!」といったので、そのままにしている。③早寝、早起きをさせようとするが、金曜日になると、夜遅くなる。④テンカンの薬は、どうなるのかなーと思う。やはり病気(テンカン、注: slight abnormal)があるから、免許の直前になって怒るのではないかと心配である。(M君はどう考えている?)日医師は、本人に何も直接いっていないもよう。本人も病気だということは自覚していない。今も薬は飲んでいない。⑤注) いままで内緒にしていたが、「針灸が良い」というので、そちらに行っていた。初めは、本人はイライラ、ソワソワしていたが、その後そこに来る人や先生に「落ちついてきた」といわれた。本人はどうしてそういうふうになるのか、わからない。「弟を鍛えてやっているんだ」といっている。<印象>主人を、この日胃カイヨウで入院させ、本人も連れて来ようとしたが「うるさい!」と反発されて、おっかなびっくりしている母親。病気が再発しやしないか、投薬しないでもよいかなど、不安な気持ちを表明する母親、静岡日病院(テンカン専門病院)のことをTVで視聴し、そちらへも関心を示す母親。母親は、息子にゆくゆくは高校再受験を希望し、“勉強に拘わる”姿をにじみ出させる。(父親入院)

7 回目(11:20) 母親④:①先々週、当室から帰っても何も怒らない本人。友達2人にもきっぱりと断っている。「君たちは、学校に行っているからいいけど、僕は勤めがあるから」と。自分できちんと生活にけじめをつけている息子。②投薬のことも、いま考えていないし、飲ませていない。本人は仕事や友達に慣れてきたのか、何しろ疲れるらしく、「疲れる、疲れる」という。③私(母親)も落ちついてきた。本人も、頭髪を会社で注意されたのか、カットした。しかし“外カッコウ”に拘わ

る。④スキーに行きたいという。しかし兄は自分から計画をよう立てない。弟はそういうことはわりにできる。結局、友達がいないものだから、家のものを誘おうとする。⑤オートバイの免許のこと。ペーパー・テストでも母親に依頼心が強く、「読んでおいてよ」という。依頼心をつけないように、と来室でもひとりでするように、私(母親)はひと足先に出てきた。「来るんだったら、他人に聞いてでも来なさい」といっておいた。本人はいやみをいっていたが結局はひとりでやってきた。自分のことは自分でやるようにさせたい。来室は、私より先になった息子。<印象>投薬を断ったことで起った本人のイライラが、母親に“またか”という不安を起こさせていたが、2週間経過するなかで、何も起こらなかった。母親は安定ムードで話ができ、こちらともぎっくばらんな感じで話しができた。(ただCo.の反省として、この母親の根源的不安——主人が入院中、いつどんなことが家じゅうに起こるかもしれないという不安——を十分に聴けなかったことが挙げられる。))

8 回目(12:11) 母親⑤:①息子は、次週出勤があり来室できない。12:29~1:4休業。②仕事がこたえて疲れてくると、言葉が荒っぽくなる。弟が試験中で気分が落ちつかないと、兄は弟の態度が横柄だといって当る。そうすると連鎖的に弟が私(母親)に当る。③しかしこの頃は、本人はさっさと自分から寝る。(生活習慣がついてきた?)そう。④弟が身体不調で、目下学校を休んでいる。兄は「学校は楽だな」といっている。私「あんたも頑張る?」というが、本人はやる気なし。⑤会社で同僚の65歳の人と机が共同。机の中に女性の写真らしいものがあり、注意されたいらしい。自分のではないのに注意されたといっ腹を立てていた。家に帰って「ボクは硬派なのに!」といい、私はびっくりした。主人が病院から帰って以後、かえって怒るようになったみたい。⑥近頃、友達とも会いたがらない。主人も不思議がっている。本人は「遊ぶと疲れるから」といっている。⑦高校に入ったとき、校則が厳しかった。それに私自身が厳しかった。あんなにイヤな思いをさせていたのか、あとで服装でもすごく派手になった。スカマン・ズボン——胴まわりの大きく、スソの細いやつ。いまの服は、上から下まで「ドボーン」である。<印象>やや表情のすぐれない母親。子どもの状態について、ユーモラスな話をしこちらもそのユーモラスさに乗ってしまった。Co.の得意とする沈んだ調子の話し合い、しみじみとした話し合いのできる調子とはちがう感じ。しかし“暗い雰囲気”で話すより、子どもが働きに出て、意欲を出しはじめ。それに対する親の期待を無にしたいという気持で聴いていた。過去の自分の厳しかった態度を洞察す

注) このことは、父親は以前(9:21. 面接3回目)に表明し、母親との不一致を物語っている。母親の内密と父親のそれとはくいちがっている。

る母親でもある。(父親，退院)

《この間，約2カ月の空白がある》

9回目(翌年2:12) 父親⑤，母親⑥：①お蔭で子どもは一回休んだだけで，ずっと自転車で通っていた。一日休んだのは，ホンダの80ccの単車を買って，スピードがもっと出るように改造するためであった。会社には「おなか痛いで休む」と連絡していた。②生活が規則正しくなった。親がいわなくても早目に就寝している。③最近，金の有難味がわかってきたみたい。「それは高いからいいよ」「もったいないからいいよ」という。女房が買ってやろうといっても欲がない。弟と好対照だ。④本人は高校進学にいまは関心がないみたい。下の子には盛んにハッパをかけているようだ。⑤下の子が腰を痛めて，好きなスポーツもやれず，不満をもっている。「学校がおもしろくない」といっているのが，心配である。(Ca 思春期の子ども扱いについて話す)。<印象>久しぶりに両親揃って来室。兄は相変わらず，仕事に通っているが，新しい人が仕事場に入ってきて自分の一貫した持場が奪われ，変りたがっている。他方，弟は“学校嫌い”になり，この方に両親は頭を悩ませている。弟への対処，扱いに手を焼いている両親。子どものことをユーモラスに表現する反面，神経を使い，疲れている様子が理解された。Caは支持的に，“思春期”の子どもの心理について話し，親自身がきゅうくつにしたり，気疲れすることが，逆に子どもの気持に反映することを伝達し，両親が気持にゆとりをもって，子どもの気持を支えたり，励ましてやることを強調した。

10回目(2:26) 父親⑥，母親⑦：①本人は相変わらず勤めに行っているが，どこか頭の中に“自分は中学卒である”ということを感じている。家の中では，他人をよくけなすようである。父親に賞められたことでも，逆にとる。気が弱くて，気がいい兄。②弟は気がよくて要領がいい。兄には絶対逆らわない。ここのところよく気がコロコロと変わる。最近まで学校に行っていなかった。学校では，服装も乱れているようで，先生に注意されるらしい。部屋にこもって，変な眼鏡をかけて，変な音楽をきいている。③父親が子どものことで苦労してわかってきたこと。上の子はポンポンいうからわかってきた。学校にいかなくなり，つまみ出したが，あとできいてみるとわかってくる。きっかけがあったのだ。下の子は，私には「いいよ」といって，いわない。日常生活の中で，ポソッポソッということが，下の子の“本音”だとわかってくる。2人の子どもで接し方も変わることが必要だ。<印象>両親は，ここのところ，長男の“中卒コンプレックス”，次男の“学校不登校”“自室ごもり”で頭を痛めている様子がよくわかる。

母親はタメ息をつくばかりで下を向いて黙り込んでしまっている。父親も，しかめっ面で自分の感情を精一杯表明している。両親それぞれが，各々の子どもについての話を取りあってしまい，“話の焦点”が絞れない感じになる。Caは困ってしまうことが，ままあった。面接終了間際に，「いろいろ先生に聞いてもらおうと助かりますわ」と本音を吐露する両親。Caもこの両親のシンドさに，重い気持がずっしりとのしかかり，この両親の力になって支えることの重要性をかみしめた感じ。

11回目(3:12) 父親⑦，母親⑧：①お蔭さまで上の子はあれで落ちついてきた。“外まわり”の仕事が性に合っている。②自分(父親)が，昔，上の子にやったことを，そのまま下の子にやって言いきかせている。“中卒のひけめ”“ヒガミ”がある。下の子に向けて，仕事＝つらい，学校＝楽といっている。母親がMは「両方みているからいえるのよ」というと安心している。③下の子の方は，何をやるか，兄を疑っている。ズルイ。上の子は何をやってよいのか，わからない。④自分(父親)は，上の子が社会的経験を積んで，社会勉強を積んできたことは事実。病気だと思ひ込んだのが，いけなかった。いままで上の子が，仕事をしたがるのを止めさせていた。いま四輪乗用車などを目標にして楽しみにしている。⑤下の子には，少し様子を見ていこうと思う。少し恥しさがわかるまで，おいておこうと思う。子ども2人とも，勉強はしないとダメだということは知っている。<印象>前回とちがって，両親とも表情や態度に余裕が出てきて切実感はなくなってきた。上の子への洞察がみられてきている。家族四人のダイナミックスが，近すぎて圧迫感，イライラになり，遠すぎてはかえって無干渉，放任となり子どもにひがまれてしまっているという感じ。

12回目(4:9) 父親⑧：①息子(長男)が，最近「遠くへ行きたい」ということを言いはじめた。理由はないようだ。T市を離れたたい，親もとを離れたたいようだ。②自分にひとつ気がついたのは，下の弟が母親にからむ。兄は下の子を殴る。これが嫌になったのではないか。この前，そのようにして家をとび出し，単車でスピード違反し，5000円の罰金をとられた。それから判断しても，逃げ出したいよう。(たまらない気持を外で晴らしたい……?) そう思う。しかしS県(父親の弟在住)の住所は知らない。子どもには，自分が中卒であり，これまでの自分はよくわかっている。しかしこれから先に何をしようということがわかっていない，と思う。③家族リクレーションのため，一家でマージャンを始めているが，女房と自分は疲れる。安い台を偶然のきっかけで，下の子が要望し，買った。④上の子は，親類に頼りたいという。一

度、出してやろうかと思うが、実は父親としても不安である。「うちの子は人に頼るからできない」。自分としては、できることなら技術(たとえば大工)を身につけさせたい。仕事のやり方も、道の伝手もわからない。住民票ひとつのとり方もわからない子。でも、やっぱり一度やらせてみるかなあと思う。⑤女房は、息子がああいう風貌、頭のかっこうで、単車の型も“改造”でないダメとなると、暴走族に引き込まれる、因縁をつけられると嫌がる。〈印象〉今回は、珍しく、久しぶりに本人も来室する。父親は、本人の“旅立ち”への仮りの試みに、半信半疑である。いままでの本人の依頼心の強さを知っているだけに、つい止めてしまう。そしてその結果、本人を怒らせてしまう。しかし本人の意志を無視しては、絶対難しいということを承知している父親でもある。子どもとの間に、“分離不安”を示している。C₀も、子どもが“出立すること”“アイデンティティの確立”の意義を、平易なことばで伝達し、父親にもわかってもらうように努めた。父親は、子どもが“家を出ること”に不安を感じている、とC₀の目に映った。(C₀には、何にも世間を知らない子どもだから、逆に家を出ることが必要ではないか、と思えた。)(下の子が下校時に、自転車で転倒する。母親は、その世話で来談できないとのこと。運のわるいことが起るものだ)

13回目(4:23) 父親⑨、母親⑨:①息子は、今日疲れたと寝ている。“外まわり”の仕事が好きである。室内の仕事は、トイレそうじ、お茶くみ、後仕末などは、指図されたりして嫌がる。特に室内の仕事は、年寄りにアゴで使われて、おもしろくないらしい。会社の慰安旅行で、本人は“未成年”ということで残された。会社では、「仕事に行く」とウソをいわれ、これも本人の気分を損ねたようだ。②この頃、友だちは来ない。本人も「断ってくれ」というので断ると、母親にその断り方が悪いという。それも不満のようである。友だちとは付き合いたくないようだ。③前回、当室に来室した翌日父と本人の2人で、S県に行ってきた。新幹線の中で「ひとりでやっていけるか」ということを色々話し合った。仕事の探し方については、新聞広告を探ることなど教えた。本人は黙ってきいていた。そのあと「しかしお父さんとしては反対だ」といった。S県の自分の弟に事情を話し、2時間くらいして、自分は帰ろうとした。本人に対し、本当に覚悟を決めてやることを確認しても、いざ私が「帰るぞ」というと、ケロッとして自分も帰ろうとする。本人は不安がでてきたのか、さびしいからか、親兄弟のいるところに頼ろうとしたのだと思う。④次の週、弟にひどく当たった注)。東京から出張して帰ってみると、女房と弟がいない。様子がおかしいので、本人にきくと一波乱起

したらしい。父親が問いただすと、スーッと蒲団をかぶってしまった。⑤いま私が上の子にやったことを、同じように上の子が弟にやっている。うちの子は兄も弟も、ひがみが強い。母親が、兄か弟のどちらかに近くなると、“疵うーひがむ”ことになる。〈印象〉母親は、パーマでセットし、ふっくらとした感じ。表情も以前のように、C₀に肩びるような感じではなく、自然な表情や動作である。“夫婦仲”も良いらしく、C₀の前で2人の子どものことを話し合ったりしている。両親とも、子どものことをめぐって、いまが踏んばり時という感じである。

14回目(5:7) 父親⑩:①子どものことを、短い期間で変えようとしたのは無理ではないかと思うようになった。小さい頃にやるべきことを急にやろうとしたのが無理だった。②昔のあれ(=暴力)が出なくなった。去年と比べると大違い。自分でも、子どもがわかるようになった。結局、われわれが思っていたことと正反対になった。私自身の時代のこと、私自身が手本になれなかった。《父親自身の生い立ちと人生への回顧と内省:24歳で復員→夜間学校→結核を患う→36歳で結婚、下宿で親のめんどうをみた。》親子間に年齢差があるため、以前は少し甘かった。小さい頃から子どもに厳しかったといっても、甘かった。子どもが高校になってからは、体で覚えさせるとはいうものの、力づくでは父親が負ける。③(C₀ 奥さんはどういう感じをもっている?)女房は私に不満がある。宗教にかこつけて不満が出てくる。こちらから相談に乗ってやらないことは多かった。自分は、昔気丈な人間だった。女房と子どもも去年のこの頃と比べて大違い。(M君は?)自分で一人前になったつもりでいる。自分で成長した気分、自覚がでてきたんじゃないか。食事もおいしそうに食べている。(会社を辞められたときいたが…)家のこと、会社のこと、色々考えて責任をとった。〈印象〉父親のみの単独来室。7カ月前に胃カイヤウを患った人とは思えぬ、血色のよい、整髪しきっぱりとした姿。父親は、自分と子どもとの年齢の開き、自分自身の人生の苦労談、奥さんとの関係、会社辞職といったことを万感をこめて卒直に表現された。C₀も、この父親の述懐の重みをもろに感じた。“子どもに無力である父親”の自己理解を伝達され

注) 弟の友達に、母親のない子がいて、弟が1000円を使ってパンを買い与えた。兄は「金を使って買い与えることは、その人に乞食として扱ったことになる。」と憤がいた。そして弟が母親に金をねだると、兄がイライラするらしい。母と弟は追い出され母の実家に泊ったという。当日、豪雨になった。

る。Coには、父親の会社退職に至った経過に、家庭における父親の無力感もその責任の清算のひとつであったと感じられた。

15回目・最終回面接(5:21) 父親⑩:息子(本人)はもう安定して一人前の仕事をやっているので「N大へ相談に行かなくてもよい」といっている。生活もリズム正しくしている。このところ、弟にも手を挙げなくなっている。弟は兄より2年ほどしっかりしている。Coがいつかいった『つかず離れず』というのは、ただし難しい。②何か辛棒するということで、気持を落ちつけるために、夫婦で朝晩、神棚にお参りをしはじめている。子どもが愚れることによって、かえって神道に熱心になった。ああいう事態(一家混乱の事態)で、かえってよかったと思う。信仰は理屈ぬきである。③これから一番心配なのは、来春四月の進学時、本人には受験する気がないようだが、それらしいことを下の子にきいている。今後、父としては技術を身につけさせていくこと。息子に何か取り得のあるものを身につけさせてやりたい。④ガタガタして以降、うちは話題が短かすぎて、暗かった。⑤これまで子どもが登校しないということで、他人に相談し過ぎて、子どもに対して自分たち自身のしつけのまとまりがなくなっていた。他人は、子どもが学校に行かなければ「叩き出せばよい」といった。自分はそれをまに受けて叩いていた。子どもは叩き出されたあと、自分が出勤後、また帰っていた。家内も他人の意見をきいて、いちいち神経質になっていた。⑥この春、子どものこともあり、責任をとって会社を辞めた。家内は、突然の失職でうろたえている。⑦今のところ、家全体の空気は“平穏”。これまでのガタガタがおかしいくらいである。〈印象〉今回も父親のみの単独来室、父親は、これまでのこの家族に表面化してきた問題を、辞職することまでして清算し、かなりすっきりしたかたちで受けとめて歩みつつあるという感じがCoには強く起った。

面接終結にあたって、1) M君とは、一度、当方からか先方からか電話をかけることで終了を確認したい。もう本人は一人前として毎日働らきに出ている状況では、そうするより仕方がない。2) 家族の中心にあるという父親、よく努力されたという印象。3) 面接の終りを申し出ることにより、6月末頃また一度電話をかけてくれるよう依頼する。

フォロー・アップ(6:26):〈自宅へ電話で伺う〉
現在状況での相互確認のためにかける。①本人は、目下勤務に励んでいる。フル・タイムの出勤である。②父親も5月末に、K市に新しい職を見つけ、今度のはわりと楽な仕事である。(当方から職が見つかってよかったこと、よろしく伝えてほしい旨を述べて、面接の継続は

終了したことを、M君の担当者と相互確認した。))

(田畑)

4. 治療過程の考察

1) M君への臨床的接近の意義

M君が両親に伴なわれて相談室を訪れて以来、合計10回の面接を継続的に重ねた。ここでは、そのようにしてM君に対してなされた臨床的接近の意義について述べる。

最初の面接でM君の来談意欲があまり高くなかったので、筆者も少林寺拳法の経験があるため、まんざら知らない仲ではないと述べて来談を誘う形になった。少し積極的に誘ってみたのは、筆者に反社会的逸脱行動のケースとの継続的な取り組みの経験が、ほとんどなかったこと、三河弁を交えて話すこの若者とその背景(若者文化)に関心が湧いたこと、そして同じ少林寺拳法をやった同志としての親しみを感じたこと、も挙げられる。

受理面接時においてわれわれは、M君についての総合所見として、全体の印象としてM君のパーソナリティ発達での未成熟さ——母親に依存的、小心であること、恐怖心が強いこと、外界への威圧的虚勢を張ることなど——の克服が主要課題であること、生活指導にも配慮した接触が必要であること、を考えていた。

筆者にはM君に会っていききたいという気持ちは確かにあったが、どれだけのが二人でできるのかははっきりしていなかった。やってみなければわからなかった。基本的には面接を通じて援助するつもりでいたが、場合によっては“拳法療法”注)ということもあるかもしれない、しかしながら深いレベルでの内的な旅を伴うことはできにくいだろう、といったことが考えられた。

面接を開始した時点で、M君はすでに「働くこと」を心に決めており、復学への意思はないようであった。親の復学への期待との間での迷いや葛藤は、明確には表明されなかった。そしてM君の当面の関心事は、働くために早く身体を治したいことと、どういう仕事合っているかであった。そのアッサリとした割り切りの良さに、筆者の方にとらわれたところがあり、最後の面接でもその決定を「確かめ」ている。やがてM君は、「生活の逆」をなおして、「墮落した生活」から抜け出し、身体慣らしの仕事(蒲団貸・乾燥業)から、より本格的に仕事に取り組んでいくことになるが、それは、『M君と

注) ちょうど2年ほど前、筆者はシンナーを吸う4人の若者(中卒で就労している、労働条件が厳しい、と話ししていた)に、ふとしたことから拳法の技(突き、蹴りなど)を教えたところ、たいへん興味を示して取り組んだことを思い出していた。

のカウンセリングの過程』で示した通りである。

面接は、1ヶ月に1回ないし2回の割合で行なわれたが、“拳法療法”はなされず、生活指導の面でも助言といえるものを述べたのは、「朝早く起きるように心がけたらどうか」(2回目)という簡単なもの1回であった。

われわれによってパーソナリティ発達の未成熟——母親に依存的、小心であること、恐怖心が強いこと、外界への威圧的虚勢を張ること——としてとらえられたM君は、面接の場に現われるまで“安全感”や“信頼感”を経験できる人間関係の場を保証されていなかったと言えよう。学校では先生や上級生に、家庭では両親に、道院では先輩拳士に、ゴチャ・ゴチャと口うるさく言われること——このことをM君は一番嫌っているのであるが——が多く、ネガティブな他者評価を受けることが多かったと考えられる。そうしたなかで「他人に干渉されずに、自分の好きなようにやりたい」というM君の願いが、出てきていたが、その自由への願いは、周囲の人間(特に大人)には容易に認められ難いものであった。M君がよく出入りした仲間集団のなかでも、他人について回る方のM君には、かならずしも安心でき満足のものではなかった。そんなM君だからこそ面接の場で、それまでとは違う人間関係を継続的に経験することは、意義があったと言える。自分が言いたいことを自由に話せて、関心をもって聴いてもらえること、人格的に承認され、尊重され、ありのままの自分でも“一人前”として扱われること、“安全感”や“信頼感”が経験できる人間関係、誉められ、励まされること、決定性と責任性が任せられること、これらのものが経験できる場なり相手が、確保できたことは、M君にとって意義があったと考えられる。そうした場でM君は、自分の考え、感情及び行動を言語化・意識化することによって自分自身を確認して、自信や活力を獲得していったのであろう。

しかしながら、M君自身は、来談することについて「悪い気はせんネ」と2回語っているものの、それ以上のことは語らなかった。M君のなかでは、来談することの意義は、かならずしも明確に自覚されたものではなかったと言えよう。来談を拒否することはなかったが、働き始め、土曜日勤務するようになると、仕事を休んでまでも来談する必要がなくなっていった。社会経験が少ないM君が、大人の職場にひとりで放り出され、そこで現実的な社会経験を積むなかで他者に存在価値を認められるようになり、心理・社会的にも経済的にも『分離・独立』の過程を歩み始めたことは意義があったと考えられる。

M君との面接過程は、一回一回の面接を積み重ね、深めていくことによって自己発見や自己探究を共にしてい

くというよりも、現実生活で感じたことや考えたことを面接の場で安心して自由に話し、自己のエネルギーや自信を補給して、又現実の生活の場へ出ていくというあり様に近かったと言える。それは、荒海を航行する船と、その船が燃料や食料を補給するために立ち寄る港のイメージであり、若い旅人とその旅人が疲れを癒すはたご屋のイメージを起こさせる。

大人に比べるとはるかに社会経験が少ない青年を援助していく場合、カウンセラーは、クライアントの内的成長を信じて、ただクライアントの内的な旅路の同行者であることのみにとどまることは難しい。内的な旅路の同行者であるとともに、青年が現実の新しい社会経験を積むという一種の外的旅——例えば、アルバイトとか自転車旅行など——へ出て行くのを気持ちよく送り出し、迎え入れる基地の役割を果たしうることが必要となることも多いのである。

M君と継続的に会っていく過程で、筆者がカウンセラーとして理想的な動きができたとは言いがたい。筆者の関心が優先しかけたり、M君の先輩拳士になろうとしたり、また、親の期待や世間的常識と同一化する誘惑にかられたり、過度に感激したりして、「カウンセリング的距離」を維持するのに苦労した。M君との間で出来なかった課題も幾つか残されたと思うが、それは即、筆者の今後の自己課題として残しておきたい。

青年期をすでに過ぎ去った大人には、自分の青年期について特殊な健忘性が起こる(A. Freud)と言われていた。M君が「遠くへ行きたい、家を出たい」と言い出した際に、筆者が高校2年生の時、二人の友人が高校を中退し東京へ行ったことを風の便りに聞き、ひとり下宿で、「先を越された」と焦り、「俺はこんなことをしていいのか」と妙に苛立ったことが想い起こされた。すでにそんなことは、忘れてしまっていたが、筆者の内なる青年期が甘酸っぱく突き動かされた感じであった。

2) 青年期自己像の様態と変容

M君とは、約9ヶ月間に計10回の面接を行なった。その間に、M君の青年期の自己像は、M君と親のカウンセリング、家族内対人関係の変化及び職場での社会的経験などを通して変容していった。

ここでは、最初(1回目)と最後(10回目)の面接の逐語記録におけるM君の発言から、M君の自己像がどのような様相を呈して変わったかを考察する。その際に、『身体像』、『自己の特徴・期待』、『家族との関係』、『学校・勉強』、『日常生活と友人関係』及び『対社会・職場』という6つの領域について検討する。○内の数字は面接回数を表わしている。

『身体像』：①首がつる。身体が途中でだるくなる。後頭部に脳波（異常波）が出た。痩せとる。体格もあまり良くない。針灸に週8回通っている。身体を動かすことは好きな方。⑩元気になった。針灸には行ってない。

『自己の特徴・期待』：①悪いことばっかやって、暴れん坊、外でケンカはやってくるし、家でも暴れる。カッと怒ると止まらん方。中途半端は嫌い。身体を治したい。技術を身につけたい。金が欲しいので働きたい。

⑩落ち着いた。「自分で生活する」とまではいかないが仕事を持って生活している。ひとりで遠くへ行きたい。家を出たい。18になって運転免許をとりたい。一生やる仕事を見つける気持ちはある。好きなようにやってきたが、若いうちしか好きなようにやれん。

『家族との関係』：①暴れて親を困らせとる。働きたいが、「まだ若いからあわてなくてもいいとか、身体をきちんと治してから」とか言われる。親は高校を退学して欲しくなかった。遊びの金も親ばっかに頼っとれん。⑩17歳だで、親がついとらなあかん。ボクがいなくなると、親は淋しがらんじゃないか。出来の悪い子ほど可愛いと言うから。夜間でもいいから、まだ学校へ行ってほしい。まだ家を出てほしくないが、父さんは「やってみるだネ」と言う。酒を飲みすぎたら、「身体をこわさないように」と母さんに言われた。弟がグレてきた。自分があまり良くなかったで、多分こうなった。

『学校・勉強』：①行きたくなくなって、高校を途中で退学した。怖い学校で、授業もまじめに受けなかった。昔から勉強は大嫌い。成績は人並み、普通。高校を受けなおそうとしたが、見合わせた。学校の方針や先生と合わなかった。地理クラブ。⑩学生さんに未練がないと言ったらウソ。やっぱり学生さんは楽。今さら戻る（復学する）気はない。勉強が嫌いなものも行ってもしかたがない。

『日常生活と友人関係』：①起きるのが12時近くで、だいぶ堕落した生活になっちゃってる。昼はTVやレコードで時間をつぶす。日曜日には友達の家へ遊びに行く。泊ることもある。3人仲のいい友達がいる。週3回、少林寺拳法を習いに行っている。自分だけひとり、取り残されるような気がした。⑩ずっと働きに出ている。土曜日もあるようになった。食費に1万円入れ、弟にも小遣いをやっている。少林寺拳法や針灸は、もう行ってない。日曜日なんかには友達とマージャンやったり、単車を乗り回したりして、後は好きなようにやっている。タバコの本数を減らしたが、もう止めれんくなった。

『対社会・職場』：①世間が、働く面でも学歴で差をつける。中途だとやりたい仕事に仲々つけない。だから、技術を身につけなければいかん。⑩甘ったれたことは言

っとれん。年の功には勝てん。働き盛りの人には、仕事や給料や信用の面で、倍働いても勝てん。仕事仲間が年上ばかりなので、つきあいが違ってくる。原付の免許を1月にとって、改造したモンキーで通勤している。

このように比較してくると次のように変容していることがわかる。

身体が順調でないという初期での身体へのこだわりには、心気症的要素も含まれていると思われるが、仕事に出るようになってからは心身ともに鍛えられて健康になり、10回目の面接時のM君は、顔色も活き活きとしてがっちりした体格になっていた。心身ともにひとまわり大きくなってたくましい若者を感じさせた。また初回の多くの否定的な自己評価のなかで、「働きたい」気持ちを表明した。家族の期待にただ反抗するばかりでなく、親に全面的に依存してきた自分から抜けだそうとする試みであった。そこには、高校中退の正当性を虚勢的に述べてはいたものの現在の生活が墮落した生活であり、ひとり取り残されている自己への直面と自覚があったのであろう。「働きたい」気持ちを持ちながら、踏み切れずにいる原因をM君は、身体の不調と16歳で若いこと及び中退組が不利な社会の仕組みに帰結していた。身体慣らしとはいうものの、他の仲間よりは一足先に働きに出ることになってM君の自己像は変わっていった。仕事の厳しさを経験して、「甘ったれたことは言っとれん」「齡の功には勝てん」と自分の「半人前」を自覚する。「学生は楽」であることを認めたくらんで、復学の意味がないことを落ち着いた調子で語るようになる。経済的に独立していくにつれて、父、母、弟の3者と自分との関係を客観的・肯定的にみる余裕が出てくる。若さへの見方も「若いうちしかできんで、好きなようにやりたい」と積極的な構えになって、「早く18歳になって運転免許をとりたい」とか「家を出たい」とか「いつか一生を捧げる本業を見出したい」という未来に対して開かれた意向を表明するようになった。

このようにM君の自己像は、より肯定的、積極的、客観的、意欲的になっていったと考えられる。（伊藤）

3.) 両親とのカウンセリングの意義と効果

本ケースを継続して担当していくに際して、われわれが明確に自覚していたのは、次のようなことであった。

両親の意向としては、本人の現状での宙ぶらりんの生活態度（学校へ行くでもないし、かといって働くという具体的なあてもないという生活態度）を、何とか抜け出せるための指導的手だてを講じて欲しいということであった。そのためには、父親は少なくとも、本人同伴で、自家用車を運転して、土曜日の午後に来室し

たい意向はかなり強くもっていた。このことは、援助するこちらの側に、好都合であった。

すでに述べたように、われわれの側での、本ケースの来談時における総合所見としては、①某病院で投薬を受けている本人であるが、母親のみへのガイダンスだけでは、母親自身も不満足であること。slight abnormalという医学的検査の結果をふまえて、本人への生活指導にも配慮した接触が必要であること。②全体の印象として、本人のパーソナリティ発達での未成熟さ——母親に依存的、小心であること、恐怖心が強いこと、外界への威圧的虚勢を張ることなど——の克服が主要課題であることととらえられていた。

このようにして開始された本人へのカウンセリング、両親とのカウンセリングは前項に述べたとおりである。

子どもの問題で来談した両親へのカウンセリングは、しかし上記のような本人の問題のみではない。子どもが病むということ、問題化してくるということは、即ちこの家族が病むということであり、かつまた家族全体が問題化してきているということの意味でもいる。

本ケースの場合も、そのような意味で、あるときは両親揃っての面接になり、あるときは母親のみの面接になり、さらにあるときには父親のみの面接になったにしても、決して子どもの問題だけが話題の中心に据えられて行なわれたわけではなかった。子どもが登校拒否を起し、家庭内暴力を起し、家族全体がその渦中に投げ込まれて嵐のさなかに置かれていったことは予め十分に予想がつけられていたことがらである。

そうであるからこそ、何を話題にしても、両親が安全であると感じ、安心して話し込んでいける、両親とのカウンセリング状況は、しつらえられるに十分必要なものであったといえるのである。ここに本人とのカウンセリングはもとよりのこと、両親をカウンセリングによって援助することの意義は明らかであろう。

なおきわめて個人的なことではあるが両親のカウンセリングを担当した筆者に幸いしたのは、この父親が漂々とした感じであって、筆者の伯父にどことなく似た風貌と雰囲気をもっていることも、好感がもてたことである。

4.) M君の家族の雰囲気障害と克服の過程

本人(M君)にとって、自分が生を受け、彼の人生を営んでいくことができる「活力」(virtue; E. H. Erikson)を附与され、吸収していくべき家族の雰囲気および家族内成員の力動的関係は、どのような様態を呈していたのであろうか。

霜山(1973)はいう。「家族の雰囲気は一見したところ何か表面的なもののような印象を与えるかもしれないが、人間が向い合う他者のいわば根底のうちにその基盤

を持っているのであり、たしかに表面的な印象の接触もあるかもしれないが、他方では人格の深部と親和性を持っているのである。他者の雰囲気を感じとることのうちに、われわれは自然と内的生活史の力とが、その他者を根本的に気分づけた直接の性質を体験するのである。この他者からの流出は、私の気分性の根源へのきわめて直接的な通路である。口唇的なもの、嗅覚的なものが文字どおり、われわれの内にとり入れられるように、雰囲気的に感じとられたものはわれわれの気分に影響を与えて、場合によっては直接の共鳴をひきおこしたりするのである。もとよりその場合の共鳴というのは、受容的、協調的であったり、あるいは否定的、拒否的でもあり得るのであり、また場合によってはその双方が両価的な緊張にあることもある」(P. 33, 傍点筆者)。M君の家族の雰囲気は、面接による援助以前では、「直接の共鳴」には程遠く、「否定的、拒否的」であり、家族成員相互に「両価的な緊張」にみなぎっていた。このことは、M君が弟に暴力をふるい、弟が一時母親の実家に預けられたこと、母親がノイローゼ気味になり、里帰りしてしまったこと、さらには父親自身も胃カイヨウに陥ってしまうことなどにより、その家族の雰囲気の息づまるような緊迫感が感じられることにおいて想像することができる。

面接の場は、このような「否定的、拒否的」であり、「両価的な緊張」の解放の場、吐き出しの場であったと言えは言いきるであろうか。3回目の面接で父親は「この一か月間、自分は“気狂い”になりそうだった」と述べているように、家族は緊迫感と緊張感にみなぎっていた。父親はその後一か月後に、胃カイヨウが発見される(6回目の面接で母親が表明することで判明した。)母親が里帰りをした後、一家は男ばかり3人で、この事態を乗り切った。M君は、父親のワイシャツのアイロンがけまでしようとする。弟は兄の誕生日を覚えていて、誕生祝に何をしようかということで、母親にも知らせ、ようやく母親も帰宅してくることになる。

面接10回目の終了間際に、「いろいろ先生にきいてもらおうと助かりますわ」と本音を吐露してくれた両親は、これまでの面接場面を“安堵できる場”“吐露できる場”と感じていたと思われる。しかし家族の緊張は、本人が“働きに出はじめること”と平行して、今度は弟が問題化(不登校、自室ごもり)しはじめ、両親にとっては気の重いこととなってまだ続いていった。12回目の面接では、本人が「遠くへ行きたい」ということで、父親はその理由のつかめなさに苦しむ。またこの回に判明したことは弟が下校時に自転車で転倒してしまう。このように、依然として一家全体のどこかに「受容的、協調的」な雰囲気に欠け、突然の事故がひき起されてしまってい

ることを物語っていると考えられる。

母親よりも、熱心に自分の問題として取り組んでいった父親は、胃カイトウ治療のための入退院をした後に、14回目の面接で、自らの生い立ち、人生への回顧と内省をしみじみ語ってくれた。これは一緒に付き合っていたカウンセラーに、いわば内密を明らかにしてくれたこととして、一すじの光明となった感じである。それは“子どもに無力である”父親自身への気づきであった。「私自身が子どもの手本になれなかった」という父親のことばに、重みのある洞察を感得することができた。

このような経過をたどって、両親は一つの生き方として神棚に夫婦揃って朝夕祈り、親自身のものをつかむようになった。家族に「平安」がとりもどせ、一家でマージャンをやる余裕ができた。

面接終期にいたって、この家族が、一応の平安をとりもどし、家族成員それぞれが、各自の役割をお互いに尊重し、親は親の、子は子の役割を遂行しはじめたことである。このことは、一緒に付き合っているカウンセラーにとっても、何にも代えられない喜びであったといえる。現実には、父親はそれまで勤めていた会社を辞職し気持ちを精算したと考えられる。面接終結一カ月後、当方からの電話で「近接の町に新しい職場が見つかり、わりに楽な仕事なので、わたしも喜んでいる」との母親の明るい声は、この一家がより有機的に前進しはじめているとの確信をもつのに、十分であった。本人も会社(蒲団貸し業)にずっと出かけており、夜も自分から気をつけて早目に就寝しているということであり、自分のしごとに精一杯になって働いていることが想像できた。

M君の家族の力動的関係で、まだ克服しきれていないと思われることがらはいくつかある。その1つは、母親自身がどのように自己課題としてこれまでの事態を感じどのように自己理解をしていったのか、不明確である。子どもの外面的表明に終わったきらいがないではない。さらに2つ目は、この兄弟間の抗争である。弟が高校受験を控えて、“中卒である”兄は、どのように弟に対処していくようになるのか。この点も不明確である。

以上まとめると、この家族の雰囲気は、面接初期の緊迫感に満ち、息づまるようで「拒否的、否定的」でありさらには「両価的な緊張」であったところから、父親を中心とした両親面接の場をしつらえることによって、親自身“感情を吐露”でき、「聴いてもらって助かる」体験をつむことによって、面接後期に、一応の家族の平安をみつけ出すことができるようになったと評価できるであろう。この家族の雰囲気が、「受容的、協調的」により近づけたということは、父親自身が面接14回目に表明したいろいろな事実、とりわけ「子どもに無力である」

父親への気づきを行なうことができたことによって把握することができたといえよう。(田畑)

Ⅲ 考 察

1. 人格発達と生活史的考察

老熟したある精神科医は、「脳波は大したことはないのです。病気よりも、本人の育て方が悪く、感情が伴わないのです。本人の建て直しを時間をかけてやる必要があるだろう。」とM青年の母親に語りかけた。かって不幸にも多くの自閉症児の母親達がそのような決定的な言葉によって、足もとを掬われる思いで診察室から出、帰途についたのであった。今日ではそれらの言葉はきわめて慎重に選ばれるにせよ、ひとたび父や母その人に語られるならば、たちまちのうちに子どもの歴史と他ならぬ生み育てた彼らの歴史はまさしく「病歴と化す」(Erikson, 1958 P.16)より他にないであろう。

ここでは、われわれの「病歴、case history」が物語るところのものから、M青年の辿った人格発達の過程について少しく論じようと思う。もとよりかかるケース研究の方法からひとりの青年の歴史を考察するにたる事実が得られる筈はないが、生活史的、発達の接近も何かしかの資料を提供するであろう。願わくば、われわれのこのひとつの症例に、多くの現代に生きる“病める青年”と同じように、「子ども時代」の意味を語って欲しいものである。

生活史をさかのばれば、自ずと初期には親子関係が、長ずれば友達関係が浮かび上がる。遊び、学習、時代等といった問題の分析も人格形成を十分に論ずるにあたって重要であるし、家族の根源的な病理の理解も際だって有効であろうが、それらのうちの一部は他の節でも少し触れられるので、ここでは対人関係を中心にして考察してみたい。

1) 生活史と人格像

面接者が聞きえた生活史の事実はきわめて乏しいもので大略次のようである。昭和34年9月出生。2900gの体重で出産時に特別の異常はなく、乳幼児期の発達は母親によれば「普通の本に書いてあるという感じの育ち方」であった。学童期になると、成績が中の下ほどの目立たぬ子どもとなり、さらに中学時代はスポーツに多少有能さを見出すものの、やはり成績は悪く全体的に印象の濃い生活史を感じさせない。

父や母、そして友人達は彼を人格的に未熟者だと見ている。幼稚で小心者で依存的であり、言い出したらきかない。“男らしさ”に乏しいのである。したがって外界威圧的となり虚勢を張る。学業コンプレックスが強い。

友達は3人いる。いるにはいるが連れだって行動する小グループにすぎない。ずっと以前から「ひとりで遊べなかった」のであるが、今なお同様である。「来いよ」と誘われると「ひょいひょい」と出て行く。語りかけられれば話し、オートバイを共に乗りまわすだけである。異性と心理的にかかわりも未だに持ちえない。「女：まだ16才なので余りわからない」(SCT)のである。無論「自殺：はとろくさい」ものにすぎない。死や生への不安や懷疑を僅かに抱く。

母や弟に暴力を振り、ひどく依存心が強いこのような青年の人格構造は考察の最後の節でも詳しく述べるように、頻りに論じられる登校拒否青年の場合とも異なって、今日ではありふれた“偏った人格”の者と言えよう。それだけに変貌する現代青年像を考察するうえで一層意義深いものがあるように思われるのである。

2) 親子関係と人格形成

周知のように、精神分析的発達理論は思春期における幼児期の意味をとりあげる。「人格を決定的、最終的に型どる思春期の過程は、先行する生活史、生来の成熟の推進、目標に向けた努力によってのみ理解され得る」のであり、「思春期に接近するための発生的観点からわれわれはまずどうしても早期幼児期に注意を向けざるを得なくなるのである。これは児童の心理学的発達の全経過の詳説を意味しているわけではない。これは衝動と自我発達のある局面に、特に男らしさ、女らしさの形成に影響を及ぼす範囲内で、選択的な淘汰を課すのである。」とBlos, P. (1962, 邦訳P.24)は言う。そして彼によると本質的に依存的で受身的な幼児は正反対の能動性を宿命的に獲得してゆかねばならぬのであり、その能動力がなければ異常性のひとつに数えられるときえ強調される。かかる能動的・受動的の両抗争の和解は男らしさ、女らしさの発達を意味深く決定するのである。

M君の父親は24歳で復員し、歴史の歯車の中で36歳にしてようやく結婚した人であり、母親としてもおよそ10歳の年に終戦を迎えた世代の人なのである。ふたりの親が述懐するように「甘やかした」のであろうことは容易に察せられるところである。男としての父親のとり入れ、同一化が成し得ない世代的共通性をこの症例もまた感じさせるのである。職業人としての一徹さ、昔気質のこの父親はとり入れるにはあまりに遠い位置にあったのであろう。我国の多くの父親は“心理的下宿人”なのだという。“父なき社会”の家族病理である。「家族構造における中心性の喪失」(岩井, 1977)が新たな不登校現象をひきおこしていると指摘されている。青年Mの父親は一年近くに互る面接を経て「私自身子どもの見本にな

れなかったのです」といみじくも語っている。

この治療的面接が父親の真剣な努力によって成功をもたらしたと考えるのは筆者のみではあるまい。西田(1976)は父親が主体的に治療に参加することによって重大な転期が得られた例を時折り経験すると述べている。本症例ではまさしく「父親の危機」(福島, 1978)が治療者とのかかわりに於て克服されたといえよう。

一方母親の位置は問題を感じさせずにはおかない。40歳を過ぎて家庭内葛藤状況に会って里へ逃げ帰る母親が何処にあらう。思春期に到って突如としてわき起った子どもの幼児的な攻撃性の対象は他ならぬこの母親であったが、「親しい者への暴力」こそは今日の青年のアクティング・アウトの戯画的象徴なのである。幼児期に必要な父親との同一化による能動性獲得の失敗。彼は母親の過保護によって葛藤から逃れ、重大な心理的障害を惹き起こさずに済んでしまう。その親子関係は極めて順調だったようにみえるのだが、しかしそれは見せかけに過ぎず、青年Mが拡大して見せた様に、幼少年Mは実におどおどした自信のない子どもだったのだ。Eriksonのいうように母性は関係の量ではなくて質なのであり、それによってもたらされた基本的信頼感対不信感の克服によって、ひとまず母親に向けて能動性を獲得してゆくのである。里に逃げ戻る40過ぎの女性を対象とするなら、加えて彼女の生家をも論じなければなるまい。M君の世代にみられる自律性、自立性、独立心、能動性といった人格特質の欠如は、父親の世代とあたかも両極をなすようにみえるが、かてて加えて、この母親にみられる生家に源を発する未熟さは、決定的に彼からそれらの活力を奪ってしまった。見せかけの母親の能動性への服従は、「思春期に男児の男性性が身体的成熟に達したときに批判的な攻撃に転化する退行を構成する」(Blos, 1962 邦訳P.37)のである。

さらには、夫婦結合の問題も最近発展しつつある種々の理論的視点(例えば岡堂, 1976)から分析する必要があらう。

3) 友達関係と人格形成

われわれの症例Mもまた多くの青年の症例と同じように、「友達とうまく遊べない」子どもである。強迫的性格構造をもち、学校恐怖症児として入院したBeres, D. (1961)の15歳の症例の場合を例にとろう。少年はわれわれの例と似かよった親子関係をもって幼児期を送り2, 3歳の頃に暗闇を恐れ始め、7歳時に悪夢がつづく。5歳で幼稚園に入園したが、通園途中泣きわめいて嘔吐した。彼は他の子どもと一緒に活動するのをいやがり、友達はほとんどなく、選ぶ友達も年下の子どもか自分と

同じように科学に興味をもっている子どもであったという Beres はこの症例が、強迫的性格にせよ、分裂性格というにせよ、青年期以後、生硬な性格形成を続け、防衛には破綻し、その結果再び神経症の症状をあらわすか、またこの種の事例ではよくみられるように、退行して分裂病的様態を呈すかもしれないと述べている。われわれの症例は分裂病とはほど遠いけれども、生硬な性格形成を続けることは予想に難くない。

かかる M 君の人格形成を論ずるとき、学童期から思春期に到るまでの時期がいたって重要である。周知のように最近少なからぬ精神医学者や臨床心理学者が、乳児期と合わせていまひとつ、いわゆる少年期から青春前期あたりに注意を向けてきつつある。Sullivan の理論 (1958a) は改めて脚光を浴びているし、中井 (1978) は思春期患者の治療経験から学童期の問題に大きな関心を示し、同じく森 (1978) は病者の生活史の検討から、子どもの時の性格特徴の表現から発達病理に鑑別できるのではないかと生活史をつぶさに見ているのである。中でも 9～10 歳そして 13 歳の中学 2 年あたりまでの時期は含蓄深いものだと言えよう。前青春期での発達が充分であれば、分裂病に発症するにあたっては比較的簡単な治療によって完全に回復するとき Sullivan は強調しているという (阪本, 1976)。

われわれが、臨床的に出会う数多くの青年たちは決して Sullivan のいう“親友” (chum) がいないし持てなかったのである。そうして実際それ以前の交遊形式しかつくりえず、長い間その段階にとどまってしまう。集合しては音楽を浮かれて聴き、オートバイを乗りまわすだけなのだ。彼らは孤独 (loneliness) の体験をもちえない。まさしく少年少女期 (juvenile era) の発達課題をさえ正しくは獲得する機会をもたず、できえなかったのである。それゆえ彼らは＜前青春期の静かな奇蹟＞(Sullivan, 1953. 邦訳 P55) — 完全な社会化 — ができないままの、身体の大いなる小児なのである。M 君の暴力の源をたどってみれば、＜力で人をふりまわす作戦 (power operation)＞ に対して周りの重要な人物が寛容であったのかも知れない。けれども＜共人間的有効妥当性確認 consensual validation＞の能力、すなわち青春以後の愛の能力をかちとれば、年齢相応の人とのつきあいの仕方が理解され、行為されるのである。彼が「愛」の能力を倍うまでにはまだ時間が必要であろう。

「ひとりでいられる能力」(capacity to be alone) (Winnicott, 1958) が、かつての母子関係、親子関係の中から育ち得ず、長じては親密なる友を持つことができぬために、真の孤独の体験を可能とし、愛の能力を育てあげることができない。かかる前青春期的過程を経ず

して、一挙にずっと以前の段階まで退行してしまう。

このように考えてくると、M 君にとってカウンセラーは自己を同一化する (少林寺拳法、強さ、男らしさ、知の力…) 対象として登場したのではなかったか。「お兄さん学生?」「お兄さんいくつ?」に始まる面接関係の展開は象徴的である。笠原 (1977) のいう「斜めの関係」でありつつ、同性のよき先輩であり、親密性をもってかかわった関係であった。まさに＜前青春期の静かな奇蹟＞がこうして惹き起こされたのである。事実、関係の発展に伴って、彼はかつての仲間達から少しずつ離れてゆくことになる。

もとよりこのような青年の理解を発達の観点から分析しようとするとき、単に対人行動的側面からだけではすべてを論ずることにはならないのは承知であるが、ここでは幼児期の親子関係と、前青春期の友達関係のもつ重要な意義について特に論じたわけである。(間宮)

2 M 君の家及び家族の問題

われわれが日頃臨床にたずさわっている時、クライアントの持ってきた問題が家族との関係に根源的に、かつ不可分に結びついていることを毎度痛感するものである。この種の家族研究は特に精神分裂病の家族研究が進んでいると思われる (鈴木, 1978; Lidz et al, 1966)。同時に家族を対象にした治療 (家族療法) の技法も最近急速な進歩をみている (西園, 1975; 山根, 1975)。とりわけクライアントが年長者 (児童・青年) である場合、この傾向は一層重視されねばならぬことは当然の理である (小倉, 1973, 1975)。

本節において筆者は、登校拒否・家庭内暴力へと次第に問題化し、無茶苦茶な反抗といった形態でしか自己を表明できないでいた M 君が、高校を自主的、主体的に退学を決定し、見習い社会人として実社会へ巣立っていった、いわゆる“立ち直り” (それは家族・両親からの出立と言うにはあまりに幼く、未熟であり、かと言って、単なる進路変更というには事態を平板化し過ぎる故、“立ち直り”と名付けた) の過程・構造を M 君が生い育った家及び家族との関係に焦点を合わせて考察することにしたい。

始めに M 君の家族—父・母・弟—を治療状況の中から素描し、次に本人の問題化を家族成員との関係においてとらえ、最後に、家族成員が相互に織り成す家族力動を“family as a whole” (Ackerman, 1958) の視点から明確化することを試みたい。

1.) 家族の素描

父親の存在様式

M君の家において父親は特に大きな位置を占めていると思われる。それ故にまず父親から考察する。この父親はいわゆる苦労人であり、叩上げのエンジニアという印象を与える。彼の生育史を見ると、24歳で復員し、働きつつ夜間の専門学校（工学関係）へ通う努力家であったことがわかる。しかし青春の前半期を戦争に奪われ苦学して卒業にこぎつけたものの、彼に待ちうけていたのは結核であった。永年の無理・心身の酷使が知らぬ間に彼を蝕んでいたのであろう。極貧の闘病生活を送りつつも、彼は狭い下宿で親の面倒を見てきたという。こうした事情から彼の結婚はかなり遅れ、彼が36歳になってからであった。

過酷な境遇に耐え、厳しい人生航路を経るなかで、彼は逆境に屈することのない逞しい精神力、強靱なねばり強さを形成していった。しかし反面、自己の主義・主張を貫くためには他者の思惑を考慮することなく、誰とも相談せず独断で事を運ぶといった側面のあることを指摘しておかねばならない。またエンジニアの職種がピッタリと合致する理性的・合理的な物の見方、考え方をしており、C. G. jung のいう思考タイプの人といえる。

家庭内では、権威のない父親では決してないものの、10歳という年齢的差のある妻、30代後半にもうけた2人の息子に対して、あまり口出しすることはなく、自分の趣味・仕事に没頭することが多かった。そこに一抹の淋しきを感じつつも、どうやって子ども達と接してよいかわからない、立往生せざるを得ない、いわゆる高度経済成長を支えてきた働くことしか知らない世代の一員ではなかったかと考えるのである。

母親の存在様式

母親に関しては内面に立ち入って入るだけの資料を持ち合わせていない。それ故に治療状況における動きから母親のイメージを浮き上がらせてみようと思う。

最初の面接（受理面接）の印象から治療者は理知的でひかえめ、主人の言い足りない所を補足するつつましい面をもった女性ととらえている。勿論、初対面であること、社会的に望ましいと見られる態度であること、さらに主人との年齢差も考慮に入れなければならないが、そうした諸要因以上に、より本質的にはこの母親の依存性の顕現と見た方が正鵠を得ていよう。彼女は治療の経過の中で、家庭内に問題が生じ、自ら処理できなくなり、心的疲労が重なると家事等は夫や息子達にまかせて実家へ一人で帰ってしまうのである。この現象はその後も見

られ、彼女の「母として、妻として」の未成熟を疑わせるものといえる。情報不足で、こうした彼女の有様がいかに形成されていったかは知る由もない。しかし、彼女の家における存在基盤の脆弱さは、子育てという“母”としての任務を達成する時に影を落したであろう事は充分考えられる。事実、彼女の養育・子育てのあり方は、口先ではやかましく、表面的には厳しい躰けをしているようで、現実には子どもを受けとめることに失敗し、子どもによりかかって、子どもの身の細々したことに口をはさむ格好で関係をもってきたのである。それ故、子どもの側も母から独立することも、また完全に甘えたという体験を持つこともできず、相互にズルズルと固着した関係の中で育ってこざるを得なかったのではないかと。

兄を可愛いがれば弟がひがみ、弟が満足するように動けば兄がひがむ、この板狭みに身動きがとれなくなると実家へ逃げ帰るといった凶器が出来上っている。もっとも、こうした母の立往生は、主人との相互の親密感の欠如、しっかりしたきずなの欠如がその基盤にあり、主人にうけとめてもらえない淋しさが根底にあったことも見逃せぬ事実であり、M君の家全体を理解する上で重要な問題点であろう。

最後に、M君との関係では是非指摘しておかねばならぬ点として、母の根強い学歴偏重の思想がある。社会常識的枠組みに呪縛され、我が子に高学歴をと願う世の教育ママの世界観・人生観に彼女も捉われているのである。M君が主体的に復学を諦めると決意しているにもかかわらず、彼女は復学への執念を忘れていない。彼女がそこまで息子に学歴を求めるのは、ひょっとしたら、彼女の弟への意地・見栄なのかもしれない、その弟は某有名国立大学を卒業しているのである。

弟の存在様式

今回のわれわれの治療に直接的な参加はなかったもののM君を知る上で大きな問題になると考える弟について考察したい。ただ弟の場合、母以上に資料が乏しいので、充分なものとはいえないことをあらかじめ断っておきたい。

弟は元来、身体的に虚弱であり、神経質なたちであるという。彼は兄の問題化・行動化に伴って、親戚（母の実家）へ2ヶ月（丁度夏休み中であつた）近く預けられることになった。第一の犠牲者となるのである。

家では万事につけ、兄であるM君より要領よく立ち振舞い、両親、特に母の関心を得るに敏捷であつた。もっともそこでは母の庇護をうけたいと家事の手伝いをするといった彼なりの努力がみられるのである。さらに身体的虚弱を少しでも補う目的で兄とともに少林寺拳法に通い始めるのである。こうした彼なりの努力は評価されるのであるが、

常に他者の眼差し、言葉にとらわれ、一生懸命に認めてもらおうとする努力も現実には実を結ばない。野球の新人戦では補欠にも推薦されず、家において、兄の家庭内暴力の犠牲者となり、両親に訴えるも我慢を強要されるのである。こうして四面楚歌の事態に陥って彼は次第に内閉化してゆくのである。

また彼は兄同様家以外ではいい子であり、いわゆる外ヅラの良い方である。それ故に家庭内で安定と満足が得られないといきおい内閉化せざるを得なかったものと考えられるのである。

2) M君の問題化と家及び家族の関連性について

M君の問題化には2つの中心的テーマがあったと考えられる。そのひとつは母親との関係で論じられるものであり、残るひとつは父親との関係で論じられるものである。

母親との問題とは、母性性が未熟で子どもを充分うけとめることができず、むしろ子どもに支配的・過干渉的にとりつき、それで安定しようとする母親と、その母故に、情緒的、社会的成熟が遅れ、人格の未発達さを母によりかかることで安定を保とうとするM君が、母との相互依存的ベッタリ関係の中から独立を試みようとしたことが、前半の大きなテーマとなっているのではないかと考えるのである。

父親との関係では、厳格で近よりがたい権威的な父親との同一化への葛藤と、その超克が中心テーマとなっている。具体的には“遠い存在”であった父親への無意識的同一化を虚勢的に果そうと弟への「ハッパをかける」行為となってあらわれる。そしてこの虚勢的姿勢が社会人として実社会へ参加する過程で実体化してゆき、それまで手につけられぬ程の、どこへむけてよいかわからぬ怒りの表出形態であった家庭内暴力がより社会化されて社会への批判となっていったのであるし、親から与えられたものを消費することしか知らなかったのが自ら労働の体験を積み、労働価値・貨幣の意味を知ることにつれて、「ケチ」といった形態で貯わえることを覚え、自律性を育てていったものと見るのである。

2つの中心課題をM君は背負い、それを乗り越えようとした血泥の闘いこそが、現象としての登校拒否・家庭内暴力ではなかったらうかと思う。そして治療終期に、実現はできないものの、家からの独立・出立を試みようとしたことは、今後のM君のあり方に明るい希望をもたらせるものである。

母親、父親との関係の中でM君の問題化をとらえてみたが、では弟との関係においてはどうかであらうか。問題化の過程ではそれ程大きく関与はしていなかったと

考える。むしろ、問題からの克服・超越過程において弟の課した役割が注目されてよいのではなかったかと考えるのである。つまり、父親に同一化し、父代理をつとめようとしていたM君にとって、弟は自己の分身、仮りの自己像であつたらうと考えられること。弟を通して、自己をみていたのではないかという点と、逆に、一方ではとうてい勝てそうにない現実の父親の代理として、M君が攻撃できる父の分身、仮りの父ではなかったかという点である。この弟を父代理として乗り越えることに成功したが故に、次には直接、父に対峙できていったのではないだろうか。

3) “family as a whole”としての家族力動

今まで、家族の素描と、M君の問題化と家族との関係を論じてきた。ここでは、そうしたM君の家及び家族を“family as a whole”の視点からとらえてみたい。

M君の家及び家族を特徴づけているのは、「家族の各々が近づきすぎて、距離(間)がとれない。」という点にある。家族成員の内の1人がある動きをすると、それが同じ量だけ他者への動きとなってあらわれ、家全体のエネルギー総量は不変である。家の単位としては変わらずに内部で問題を処理しようと、家族成員各々が無意識的に動くといった面が顕著である。(家庭内だけでのエネルギーの移転)

上記に示したM君の家及び家族の力動関係を、「家・家族象徴描画法^{注)}」によってあらわすと下図のようになる。

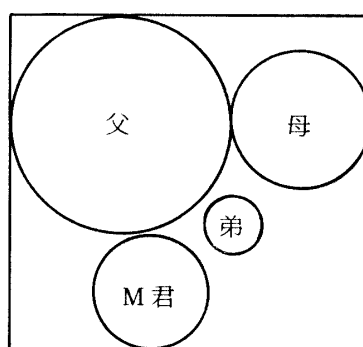


図 2

(図で□は家を、○は家族成員をあらわしている。)

父親が家の大きな部分を占有し、支配的役割を取っている。母親は従順につき従い、補完的役割をとることで安定している。弟は両親のすき間になんとか迎

合する形で安住の場を得ようとしている。

M君はこうした事態に対して、始めは母親を通して父親に対していたものが、次第に母から独立を試みたり、父代理の弟に対していたり、直接的に父親に対しようとしていると考えられるのである。

注)「家・家族象徴描画法」については、1978年日本心理学会第42回大会において、赤塚らによって発表された。詳しくは発表論文集を参考にされたい。

表1 治療過程にみられる家族力動の変容

時期区分		父	母	M君	弟
〔問題化〕 初期	I 〔M君の問題化〕	厳格で一面的, 近よ りがたい存在	父親追従・母子ベッ タリ関係	登校拒否 家庭内暴 力 心氣的訴え	/
	II 〔家全体の混乱〕	〔M君の問題化に伴い, その影響が家庭全体に及び始める。特に弟は2ヶ月の間母の〕 〔実家に預けられることになる〕			
〔苦闘の深化・拡大〕 中期	III 〔母の実家逃避〕	気が狂う程の苦しみ 我慢どころ	苦悩に耐えられず実 家へ逃避休養	働きの金を得ることを 望む。依存的	両親に認められたい と必死の努力
	IV 〔父の病氣入院〕	心身症への逃避 入 院 弱さの顕現	M君の復学への未練 養育の反省	父への同一化(弟へ) 自律化	抑えつけられた不満 の爆発と抑圧
	V 〔弟の問題化〕	子どもの心理が少し わかってくる	/	父との一体感。お金 を貯わえる	学校嫌い 内閉的世 界へ逃避
〔超克へ〕 後期	VI 〔M君の再生〕	〔家族麻雀をするなどでなんとかまとま ろうと両親の必死の努力〕		遠くへ行きたがる (仮性出立)	母とともにM君に追 い出される
	VII 〔父親の再生〕	父親である自分を取 りもどす	依然, 子供をうけと められない	成長した気持。自覚 化, 一人前化	依然, 問題は残した ままである

では次に、治療過程において、家族力動がどのような動きをしたのか、表1を参考に考察してみたい。

家族相互が近づきすぎて、距離がとれず緊張をもたらすM君の家及び家族の治療過程における動きを、前期、中期、後期に区分し、各々、「問題化」の時期、「苦闘の深化・拡大」の時期、「超克へ」の時期と名付けた。さらに、各時期区分を家及び家族における主要テーマ別に細分し、7つの段階をもうけてみた。これらを概観して思うことは、一人が問題化し、家全体がその鎮静につとめ、やっと問題がおさまると他の成員が問題化してゆく。そして、M君から母、父、そして最後は弟へとこの動きはみられるのである。つまり家族が全体で一つとして作用し、ホメオスタシ的に動いていると考えられるのである。

具体的に話を進めると、M君が学校でそれまで自分をかばってくれた友人がいなくなるという理由で登校拒否を起し、そのやり場のない不満を家庭内暴力でぶつけてくる。それに対して両親は一致してM君にあたることはなく、二人ともオロオロしてふりまわされ、母はM君を連れて病院通いを始めるのである。この混乱を乗り越えようとしてこの家は、家族の一人を切り捨てること、またスケープゴート化することを選んでいく。オーには弟が母の実家に2ヶ月にわたる長期の滞在を課せられることになった。この間、できるだけM君の要求に合う形で両親は動いている。特に母のベッタリ関係はそれによってしか他に方法が見つからないかのようである。しかし、その母も無理がたたり、過労から実家へ逃げ帰らざるをえなくなってくる。オ2の犠牲者というべきであろうか。ただ、この母には帰るべき里＝防波堤があっ

たのである。お里帰りは、M君の家からの逃避であっても、母には心の休養地となり、一時的ではあるにせよ、安定化は保てるのである。

ところが、それまで、じっと家族の嵐を耐え抜いてきた父が犠牲者となった。父には帰るべきお里はない。彼はそれ故に、身体性においてしか逃避の方向を持ち得なかったのである。そして胃潰瘍という病いの形態において家からの離脱をはからねばならなかったのである。ところが、こうした父の姿は、それまで強く、逞しい、弱さを見せることのなかった「厳父」「一徹な父」のイメージを打ち破り、弱味をもった存在として映ったのではないだろうか。

M君に始まり、母、父へと問題は波及していったが、次にはそれまでいい子であることによって両親の愛を得ようとしてきた弟が、兄の行動改善にともなって問題化しだした。兄の度重なる暴力(M君は「ハッパをかける」と言うが)と、反抗することを両親から抑えつけられた弟はひがみを増大させ、一時的に不満の爆発を試みるもそれも不発に終り、次第に内閉化し、内閉的世界に引きこもっていくのである。

このように家族成員が一通り、スケープゴート化し、疎外状況の中で苦しみを体験したのであったが、しかしその後、M君及び父親の立ち直り、再生がなされ、家族がまとまろうとする動きを見せ始めた。このM君及び父親の動きは他節(II.の4)で詳しく論じてあるのでここでは省略する。

以上、治療状況を通して M君の家・家族の動きを見てきたのであるが、改めて、青年の成長にとっての家及家族の大切さ、存在価値の大きさを痛感するものである。

(江口)

3 「症状」の意味

ここで問題となっているのは、思春期の case ではあるけれども、この症例は思春期の精神病理学で好んでとりあげられるような登校拒否でもなければ、無食欲症や退却症や離人症や強迫症といった神経症圏のものでも、無論、分裂病でもない。むしろそうした問題に親しんできた筆者にとっては、こうした教育相談の場においてこそ最も頻繁にであられるような、より「正常」に近い症例の「症状」の意味について論ずることは、かなり困難の覚えられるところである。その意味では、この症例提示は今日の思春期精神病理学へのひとつのアンチテーゼの提起ともなるものであるが、この節ではむしろそうした精神病理学的な立場から、この主題に接近してみることにした。

「症状」の意味について考察するとはいっても、彼が必ずしも「病(理学)的」なのではない以上、ここには本来の意味での「症状」もほとんど存していないといわなくてはならないであろう。たしかに彼は高校を中退してはいるが、いわゆる「登校拒否」なのではない。高校にいかなくてはならないという内的な当為との葛藤はないからである。「何のために勉強しなくてはならないのか、勉強の嫌いなものが学校にいても仕方がない」として高校をやめることを彼は明言しているし、実際に復学する気のないことも明白である。再受験を前にして、「首がつる」という身体症状が出現したのであったが、これはこうした意味方向の身体領域における表現であり「働きたい」という意志を実現するにあたっての準備性を確保するための手段でもあったのであろう。

彼の「暴力」ということに関しても、それは「家庭内暴行」というるほどには、内面的な自立課題に追いつめられた短絡的な外的「遠ざけ」の行動として受けとめうるような深刻味には乏しい。むしろこれは上に述べた「学校をやめて働きたい」という意味方向を阻碍されたことへの怒りとしてのより単純な攻撃行動、自己主張であったように思われる。この点、彼の暴力は真の意味では「acting out」ともいいがたいのではないだろうか。彼が「家を出たい」ということにおいても、そうしないかぎり決して実現しえない「自己が自己であること」のためのぎりぎりのあがきということ、すなわちそれまでの「古い対象関係」からの「訣別」ということ、に重点のおかれた意味よりは、小さい頃から彼が「キョロキョロとして落ち着きのない」性格であったことと関連して、むしろいわば「次々と新奇なるものに向けられる関心」という方向性が読みとられうるであろう。「新奇なものへの関心」とはいっても、時間性は決して将来志向的なのではない。SCTには「将来：は別に考えていない」「好

きなもの：は友達と遊ぶこと」「友達：はいいやつばかり」「自殺：はとろくさい」「金：はたくさんほしい」「年をとったとき：そんなことはまだ考えていない」「調子のよい時：はよく遊びよく食べることに、よく寝ること」等々と記述されているが、ここにはいわゆる「出立」ということのもつ将来肥大的な性格よりは、移ろい漂よいいく「永遠の現在」的な存在構造がみいだされるであろう。こうした意味で、彼のあり方は一言にしていえば、いわゆる「free floating ego」の様式にかなり近縁なのではないだろうか。

さて次に彼にとっての「身体」の意味について少し考えてみることにしよう。木村(1978)は思春期の「身体」の問題を論じて次のように述べている。

「思春期以前の幼い自己の一重性は、個別性を否定して生命的自然への還帰を志向する性愛の原理に貫かれたノエシ的自己の目覚めによって、根本的な変革の要求をつきつけられる。それまでの現実主義的な自己意識の辺縁に、あるいはその背後に、超現実的でコスミックなアウラが立ち昇り、自己意識に奥行きと兆候性を与えはじめる。自己ははっきりと自己の二重化を意識せざるをえなくなる。ノエマ的自己とノエシ的自己、アポロンの原理とディオニュソスの原理、この互いに相反する両方向の弁証法的止揚の上に『私が私である』という自己同一性を確保するという困難な課題が、思春期の自己に課せられることになる。」(木村, P. 333)。

そしてこの課題の舞台となるのが、「身体」である。

「自己とは、元来はいかなるノエマの対象化をも拒む純粋にノエシ的な『はたらき』であり、なんらの固定点をももたずに随所に主となる絶対に自由自在の志向性である。しかしそのような自己が個的存在としてこの世に実在しうるためには、自己は不本意ながら身体的存在という、したがってまた時間的・空間的存在というノエマ的限定をこうむって『もの』とならねばならぬ。『自己で有る』ためには『自己を有つ』ことにおいてしか実現されえない。

自己は本来自己とは異質の存在性格をもつ身体を『所有』することにおいてしか、自己として現実に『存在』することができない——」(同)

われわれの症例Mにおいてはしかし、こうした意味での身体はほとんど問題化してはいない。彼は多少 negative-identifyぎみに逸脱集団的文化に親和的なスタイルに身をやつし、髪型を整えている。「強くなるため、発散するために」といって少林寺拳法をやり、「身を護るために」といって千枚どおしを携行する。身体性の延長、

拡大としての乗りものに関しても、まずオートバイから次には自動車へという要求の移行もごく自然であり、normalでもある。すなわち自己の二重性が問題化してくる舞台としての身体、一端異質なものとして疎外され、所有しなおされなくてはならないものとしての身体には何らかの異和感も不協和音もない。むしろ「再受験したくない」というノエシスの自己の方向性を「首がつる」という形で身体が表現しようということ自体、彼の自己と身体はきわめて密着的、同質的できえある。自己と身体の乖離と再所有の課題が青年期特有の問題であるとするならば、彼にあっては依然として青年期以前の段階が遷延化されたままになっているともいえるし、また無問題的にこの課題はすでに達成され、「早期完了」してしまっているともいえる。いずれにしても、この両者のあり方は元来異質なものではなく、要するに「危機」的ではないということにおいて共通している。もう一度、SCTの例を引くならば、彼はそこで「女：まだ16歳なのでよくわからない」「恋愛：はしたことがない」「夫：はまだよくわからない」等々と書いているが、これはさきに引用した文章の冒頭の内容、漠然とした性愛の原理へのおののきといったものとはあまりにもかけ離れているといわなくてはならないであろう。

仕事に就くといういわゆる「社会参加」のあり方もごくごくスムーズなものである。アルバイトについて、彼は「体はえらいが、わがままはいえない、仲間とはうまくやっている、まだ半人前で駄目、早く運転免許をとって一人前になりたい、金をもらうのははじめてでうれしい、今は仕事が楽しい、仕事しかないみたい」等と述べSCTには「仕事：とは汗水流して働くこと」「私が羨しいのは：自分の好きな仕事を一生懸命やっている人」「男：はいつか一家の大黒柱になる」「私の野心：は大学までいったやつに勝つこと」と記述している。ここにも「社会との対決」といった深刻な響きはなく、むしろ流動的、表層的に現実適応的であるような印象が強い。こうした社会参加がごくスムーズであるという点に関しては、治療的援助の影響にも大なるものがあつたにちがいない。しかし、それは別の節で焦点をあてて論じられているので、その側面についてはここではおいておくことにしたい。ここで重要となるのは、そのような治療的関与によって、より容易にならしめられた過程を基底的にささえ、可能にさせた彼の基本的存在様態についての考察である。

すなわち、上に述べてきたような彼の非危機的、free floating ego 的、表層的現実適応的なあり方は、臨床的概念をもちいて強いていうなら「Psychopathie」（性格形成の呑み）の存在様式に最も類縁のものであるということ

ができよう。しかし無論、こう断定するには年齢の上からも程度の上からも、もとより無理のあることではあるけれども、これはあくまで「強いていえば」ということにすぎず、基本的な彼の現存在性格を類的に把握するための一段階に他ならない。こうして、たとえば偶然的条件できえ整うならば、「彼はシンナー嗜癖にもなりえていたであろうし、付和雷動的にしる非行的逸脱集団に属しえてもいたであろう」といったことが推測可能となり、あるいはまたさきにも考察された家族関係のあり方についても一層明確な枠組が与えられることになるはずである。

Psychopatの家族関係を最も単純化して図式化するならば、それは「母性的愛情関係の稀薄性と父性性との対立」として特徴づけられるのではないかと筆者は考えている。彼の場合も、幼児期における家族関係は実質的にはかなりバラバラのものではなかったのではないだろうか。現在でも家族と一緒に食卓につく機会は少なく、母親は問題がおければ実家に帰ってしまうような人である。そこには質的にむしろ「deprivation」に近い状態があつたのではあるまいか。父親は暴君的でこそないけれども、黙々と我が道をいくというかのよう職業生活に徹して生きてきた人であり、一面の強い父性原理をそなえた人もあつた。しかし親が自分自身の問題に精いっぱいである時には、小さなものをいつくしみ育てる「care」は決して充分にはできない。もし父親がもっと暴君であつたり、あるいはたとえ無言ではあれその信念を家族に対してもっと圧迫的におしつけ、他方母親が結婚生活に対する無意識的失望を補償するためにもっと子供にしがみつき、過保護的、侵人的になっていたならば、おそらく彼は境界例を理想型とするような危機状況のうちにおちいていたにちがいない。そのような形で彼の個別化そのものが破壊されることはなかったけれども、彼は父親のそうした黙々と歩む近づきがたきゆえに、父親を自然な形でのりこえていくための準備性を自身のうちに形成させることができなかつたのであろう。しかし一般的にいても、青年がその父親をのりこえ精神的に自立するという課題にはかなりの困難がつきまとうものであり、そこには何らかの「initiation」が必要とされるのであろう。彼が「厳しすぎる」として抵抗した「学校の規則」とはまさに父性原理そのものであり、それを拒否し退学するという、その意志の発現として暴行をなすということ、こうした儀式を通過することによってはじめて彼は象徴的に父親をのりこえたのであろう。この時、同時に彼は「お父さんももう今に爺だし、子供のわりにしては高年齢で……お父さんも長男で、今まで好きなように気ままにやってきた」「ボクもボクの好きなようにやる。自分自身がちゃんとしとればいいんじゃないかな」

と述べて父性原理を内在化させている。かなり不明瞭な形でしかないけれども、これはいわば「心理的父親殺し」あるいは「心理的父親の葬儀」の体験とそれによる父親の同一視の問題であるといつてよい。こうして彼は「認めてもらうんじゃないか、認めさせる方じゃないかな、まだ働きだしたばかりだし、これから仕事しっかりやれば信用してくれると思うしね……一生懸命やるしかない」と述べ、巣立っていかうとしている。このような父親をのりこえることと受け入れることという青年期の課題は決して危機的ではない青年においても、あるいはむしろそのような青年においてこそ最も顕現的な形で、目立ってくる事柄なのであり、父親の例からいうならば、子供の幼児期から「いつ自分をのりこえてくれるのかということへの関心をはらうこと」がその課題となるのであろう。

以上のような彼の社会参加への決断の過程に、「お兄さん」としての治療者と彼ののりこえをより容易に受容させようよう父親を援助した父親の担当者とが大きく関与したことには、ここであらためて論及する必要はないであろう。（池田）

Ⅳ ま と め

前報において、われわれは現代的状況における青年の特質、青年がその人生途上で遭遇する“危機”“岐路”の積極的意義を論じ、かつそのような青年のあり方を明確にすべく臨床青年心理学の方法論を提示した。そしてそのような方向ですすめる際の、われわれの立場を3点に集約して提示した。

本報では、具体的臨床ケースをもち出し、われわれの立場での考察を行なった。

用いた症例は、16歳11カ月の男子M君であった。主訴は、高校中退し、家でブラブラしているので今後の指導を依頼したい、とのことであった。

本人には10回の面接を9カ月にわたって行ない、両親には15回の面接を11カ月にわたって行なった。

本人との臨床的援助の過程で、復学や再受験の意志はなく、働くということをめぐる、本人の半人前ではあるにしても、心理社会的経済的にも「分離・独立の過程」を歩み出していったことが明らかにされていった。来談への意欲は、かならずしも高くはなかったが、「お兄さんの存在」としてのカウンセラーの前で、M君なりの自己の選択を成し遂げていったことは、評価されよう。しかし、援助的関係のなかで、いま一步自己探究を十分に深められなかったという治療上の限界は、認めなければならなかった。

他方、このような青年M君の両親との臨床的援助も、本人の援助と併行して行なわれた。ある時は両親揃って

またある時は片親のみの来談であったが、両親は本人の問題はもちろん、弟の問題、家族全体の問題と取り組んでいった。援助の過程で、特に父親は、来談に安堵の感を深め、かつこの一家のバラバラな、苦悩に満ちたあり様をまさぐっていった。そして、父親自らが「子どもに手本になれなかった」ことに気づいていったことは、ともに援助的關係をもったカウンセラーには、一つの光明と感銘を与えるものであった。このような父親自らの気づき（awareness）を通して、この家族に一時的な平安が獲得されたことは、援助が決して無駄でなかったことを意味している。家族の雰囲気なごみを感じることができた。しかし、母親や弟の問題は、一家の中では依然として残されており、15回の面接による援助の限界を認めなければならなかった。

臨床青年心理学的視点での考察は、上記の本人ならびに両親との面接結果にもとづいて行なわれた。

1. 人格発達と生活史的考察。ここでは、症例Mの理解を深めるために、生活史的・発達のアプローチから考察を行なった。特に、対人関係に焦点を合わせ、幼児期の親子関係と前青春期（preadolescence）における友人関係のもつ、重要な意義について論じた。

2. M君の家および家族の問題。このM君の家の特徴として、家全体が一つの動きを示していること（表1に示した）、そしてそれらのことがらが、本症例Mの問題と深くかかわっていることが把握された。M君が、われわれの立場でいう「対人的距離」に戸惑い、混乱していたありようが、家族全体の力動的関係の中で浮き彫りにされた。

3. 「症状」の意味。本症例Mは、危機的であるよりはむしろ平穏であり、“free floating ego的”、表層的現実適応的であることが明らかにされた。こうした彼の存在様式は、類的に把握するならば、Psychopathie的であるといえる。このようなあり方において、父親との対決と乗り越え、そしてそれによる父親原理の内在化という青年期の課題が表面化してきたが、こうした心理的父親の乗り越えの問題は、青年期一般にとっても重要な意味をもつものであることが指摘された。

現代的状況における青年、とりわけ高等教育志向に迫いやられ、自己の主體的選択を遷延化させられている“声なき大衆”高校生の悲鳴とうめきが聴こえてくるようである。われわれは、かかる診断的にも治療的にもきわめて難しい症例を通して、以上の諸点を明確化しえた。

（田畑・伊藤）

文 献

- Ackerman, N. W. 1958 *Psychodynamics of Family Life* Basic Book Inc., New York.
 (小此木啓吾・石原潔訳 1970「家族関係の理論と診断」「家族関係の病理と治療」岩崎学術出版社)
- Beres, D. 1961 性格形成 ローランド, S. 他編(青年病理研究会訳 1975)「青年期の精神分析 I」誠信書房 1-12.
- Blos, P. 1962 *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*. The Free press of Glencoe, New York. (野沢栄司訳 1971 青年期の精神医学 誠信書房)
- Dukes, W. F. 1965 N = 1. *Psychol. Bulletin*. 14, 74-79.
- Erikson, E. H. 1958 *Young Man Luther: A Study in Psychoanalysis and History*. Norton & Co. (大沢隆訳 1974 青年ルター 教文館)
- 福島章 1978 現代青年心理ノート 日本教文社
- 岩井寛 1977 文化と社会病理学 宮本忠雄編「文化と精神医学」誠信書房
- 笠原嘉 1977 青年期—精神病理学から— 中公新書
- 木村敏 1978 思春期病理における自己と身体 中井久夫・山中康裕編「思春期の精神病理と治療」岩崎学術出版社 321-341.
- Lidz, T., Fleck, S. & Cornelison, A. R. 1966 *Schizophrenia and the Family*. Int. Univ. Press, New York. (高臣武史・鈴木浩二・佐竹洋人監訳 1971 精神分裂と家族 誠信書房)
- 森省二 1978 思春期と境界例 中井久夫・山中康裕編「思春期の精神病理と治療」岩崎学術出版社 189-221.
- 中井久夫 1978 思春期患者とその治療者 中井久夫・山中康裕編「思春期の精神病理と治療」岩崎学術出版社 1-15.
- 西田博文 1976 現代社会と青年期の神経症的病理 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦編「青年の精神病理」弘文堂 71-89.
- 西園昌久 1975 家族療法の歴史と現況 臨床精神医学 4, 1431.
- 小倉清 1973 児童精神医学における親の問題 精神医学, 15, 1252.
- 小倉清 1975 子供の精神障害と家族 臨床精神医学, 4, 1471.
- 岡堂哲雄 1976 心理学的家族関係学 光生館
- 阪本健二 1976 青年期と精神分裂病 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦編「青年の精神病理」弘文堂, 131-154.
- 霜山徳爾 1973 家族の病理 滝沢清人・相場均・南博編「家族の臨床社会心理学」(現代人の病理第3巻) 誠信書房, 23-39.
- Sullivan, H. S. 1953 (a) *Conceptions of Modern Psychiatry*. Norton & Co. Inc., New York. (中井久夫・山口隆訳 1976 現代精神医学の概念みずす書房)
- Sullivan, H. S. 1953 (b) *The Interpersonal Theory of Psychiatry* Norton & Co. Inc.
- 鈴木浩二 1978 家族精神療法 (現代精神医学大系 精神科治療学 I 5A) 中山書店, 364-387.
- 田畑治・生越達美・池田博和・伊藤義美・間宮正幸 1977 臨床青年心理学序説 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 24, 85-106.
- 田畑治・村山正治編 1977 来談者中心療法(講座心理療法 1) 福村出版
- Winnicott, O. W. 1958 *Capacity to be alone*. Int. J. Psycho-Anal. 39, 416-420. (牛島定信訳 1977 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社収録)
- 山根常男訳編 1975 家族の診断と治療 誠信書房

(1978年7月31日受稿)

PROBLEMS ASSOCIATED WITH SCHOOL REFUSAL

Some considerations in clinical adolescent psychology, using test case M.

Osamu TABATA, Yoshimi ITOH, Hirokazu IKEDA, Norio EGUCHI,
 Tatsumi OGOSHI, and Masayuki MAMIYA.

In the previous paper, we discussed the characteristics of adolescents in modern situations and the positive meaning of the crisis or the cross-roads of life which they encounter, and

also presented the methodology of clinical adolescent psychology in order to clarify what adolescents were. We also presented our three points of view about our practice and research in this field.

In this paper, we examined a concrete clinical case from our points of view. The client was a boy, M who was 16 years and 11 months old. His parents visited our guidance-clinic to obtain help for their son, who had given up school and was leading an idle life. We had counseling sessions with him 10 times in 9 months and his parent or parents 15 times in 11 months. Through the process of clinical supports, M made it clear that he had no mind to re-enter a high school but to work somewhere. Through the process of counseling he began to improve steadily psychosocially and economically, although he was not fully independent. The client's motivations to consult was not particularly high. The therapeutic limitation lies in the fact that his self-exploration was not fully facilitated under the supportive relationship with the counselor. But it was evaluated positively that he achieved his own selection under the support of the counselor, who had played the role of his brother or senior.

Parallel supports were also given to the client's parents. They approached the problems of their two sons and whole family. Through his counseling sessions, the father gradually began to feel relieved and explored farther into the disagreeable and distressful state of his family. He himself became aware that he could not have been a good model to his son. Moreover, the peace of the family was temporarily acquired through this awareness. We certainly felt that a mild atmosphere we attained in the family. The supports to the family were proved to be fruitful to some extent, but the problems of the mother and the younger brother were left unsolved.

The considerations from the view-points of clinical adolescent psychology were done according to the results of the counseling.

1) The client's personality development and life history.

In this section, we studied the life-historical and developmental approach to deepen our understanding about M's personality. Focusing especially on the interpersonal relationships, we discussed the significance of the parent-child relationship in early childhood and his relationship with his chums in preadolescence.

2) The problem of M's home and the family as a whole.

One of the characteristics of M's home was the high tension in his family in general (see Table 1), and his difficulties were closely connected with this high tension. How he had been puzzled and confused by the interpersonal distance within the family was disclosed in the dynamics of the family as a whole.

3) The meaning of the symptoms.

We assume that M is calm, "free-floating", superficial and reality-oriented rather than in serious crisis. It can be seen that pattern of his existence is that of a psychopathic patient. It was made clear that his developmental tasks of adolescence were the confrontation with his father, the conquest over himself and the internalization of the paternal principle. It was also pointed out here that identification with one's father is indispensable to adolescence in general.

M's case is typical of the anxiety of modern youth, who are called "silent majority" or "the masses without voices", having self-independent selection prolonged in modern higher-education-oriented situations. We have clarified the problem of modern Japanese youth from the various points mentioned above through the diagnostically and therapeutically difficult case of M.